

白石市文化財調査報告書第17集

## 三部山遺跡調査報告書



昭和 52 年 3 月

白石市教育委員会

## 序

白石市中心部の北、福岡地区は、ふるくから遺跡の多い場所として、知られているところです。

三部山遺跡は、その一つで、白石市福岡、高野英雄氏の宅地造成に伴い緊急発掘調査された遺跡であります。

このたび、調査報告書がまとまり発刊のはこびとなりました。

この報告書は、白石市の郷土史はもちろん、東北地方の歴史を究明するうえでも、貴重な参考資料になると思います。ご活用くださいと存じます。

最後に、この発掘調査にあたり、ご尽力いただいた白石市文化財保護委員会委員中橋彰吾氏、同高橋辰男氏はじめ、宮城県教育庁文化財保護課調査第1係長後藤勝彦氏、同第2係長斎藤良治氏、また、今回の発掘調査に伴い、横生調査でご協力いただいた上野雄規氏、佐々木敏雄氏、ならびに調査協力者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和52年3月

白石市教育委員会

教育長 小沢五郎

## 例　　言

1. 本書は白石市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の指導を受けて実施した、三郎山遺跡の発掘調査報告書である。
1. 本遺跡の調査は昭和51年8月17日から9月2日まで実施したが、この間、降雨のため調査を中止した日もある。
1. 本遺跡の調査前に上野雄規、佐々木敏雄氏によって植物調査が行なわれ、上野雄規氏によって報告がまとめられたものである。
1. 石器の石質については駒板典義氏の同定によるものである。
1. 出土遺物や調査中の写真は菊地逸夫、北爪均が担当し、撮影したものである。
1. 出土遺物中チップについてはまだ未整理であるが、遺物の整理は調査員全員で行なった。
1. 石器の実測と作図は阿子島香、佐川正敏が担当し、上器の拓影は相原淳一が行なった。
1. 遺物の実測作業および作図や、遺物の観察等については、東北大学考古学研究室の諸氏より多くの助言と御指導をいただいている。
1. 報告書の分担執筆は下記の通りであるが、全体の編輯は中橋彰吾が行ない、挿図、図版等の表現は協議の上統一をはかった。

まえがき

中 橋 彰 吾

I 三郎山遺跡の位置と地形

中 橋 彰 吾

II 周辺の遺跡と環境

中 橋 彰 吾・相 原 浩 一

III 遺跡の植物

上 野 雄 規

IV 調査実施要項と調査日誌

阿 子 島 香

V 調査の方法と概要

中 橋 彰 吾・阿 子 島 香

VI 出土遺物

1. 上 器

中 橋 彰 吾・相 原 浩 一

2. 石 器

阿 子 島 香・佐 川 正 敏

VII 考察とまとめ

中 橋 彰 吾

跋 あとがき

中 橋 彰 吾

1. 本書の第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、複製したものである。(承認番号・附52・東復第186号)

## まえがき

三部山遺跡は、かつては田上遺跡の一部として把握されていた。

田上遺跡は、天津沢川北岸のやや高まりをみて東方にのびる台地上にあり、遺物の散布は量の差異はあるが、広い地域にみられ、三部山地区はその東端部に位置している。

この地域で採集される遺物は、石器（石鎚・石匙・不定形石器）や石屑が多く、土器はほとんど採集されず、遺跡の編年的位置づけなども不明であった。この田上遺跡とともに、同じように土器の採集されない遺跡として、天津沢川をへだてた対岸の台地上にある向山遺跡も、早くから特異な遺跡として地方の研究家に知られていた。

このたび、三部山遺跡の一部が宅地化されることになり、白石市教育委員会は<sup>当</sup>事者側と本遺跡について協議を重ねてきた。

この間、宮城県教育庁文化財保護課調査第1係長・後藤勝彦氏の現地視察等があつて、白石市教育委員会は当該地域の発掘調査を実施することにした。

筆者が、4月に最初の現地踏査を行なったときは、遺跡内の雑木林が伐採されており、その林床には背の低い植物が繁茂していた。その後、遺跡をおとずれるたびごとに、これらの植物は生長を早め、7月には人の背をはるかに越し、その生長の早さには目をみはるものがあった。

このような植物も、地表を掘り返されたり、道路や住宅の建設等による環境の変化などによっては、全くみられなくなってしまうものもある。こうした植生の変化や遺跡環境を把握するために、発掘調査区およびその周辺の植物の調査を、上野雄規・佐々木敏雄氏の協力をえて実施した。

発掘調査は日程の都合もあって、8月15日から31日までの予定であったが、最初から雨にたられ、8月17日から開始、途中しばしば雨によって調査が中断されたが、9月2日に調査を終了した。

調査期間中に、宮城県教育庁文化財保護課調査第2係長・斎藤良治氏の現地指導を賜わり、記して感謝の意を表します。

中橋彰吾

## 目 次

序 文	白石市教育委員会教育長 小沢五郎
例 言	
まえがき	中橋彰吾
I 三部山遺跡の位置と地形	1
II 周辺の遺跡と環境	3
III 遺跡の植物	上野雄規 4
1. 白石辺の植生	4
2. 遺跡の植生概観	4
3. 分布上の貴重な植物	7
4. 遺跡に産する高等植物目録	9
5. 考 察	19
IV 調査実施要項と調査日誌	33
1. 調査実施要項	33
2. 調査日誌	34
V 調査の方法と概要	36
VI 出土遺物	44
1. 土 器	44
2. 石 器	47
VII 考察とまとめ	59
1. 遺跡について	59
2. 土器について	59
3. 石器について	60
4. まとめ	60
VIII あとがき	61
図 版	
表 紙 (コシノカンアオイ)	

## I 三部山遺跡の位置と地形

三部山遺跡は白石市街地の北方約1.5km、標高約78m程の白石川左岸の浸食段丘上に位置し、白石市福岡字長袋三部山地内の畠地および雜木林に所在する。

この地域の地形は、奥羽脊梁山脈藏王連峰東麓部に派生するいくつかの複雑な山稜が南東に走っており、その末端部が浸食されて段丘や扇状地を形成し、白石盆地に接している。こうした段丘は白石川左岸沿いに発達しており、原段丘、長袋段丘、三本木扇状地、深谷段丘などと地形的に大きく区分されている。

本遺跡の所在する長袋段丘は、藏王山東麓末端の南部山丘陵（標高約200～290m）の東端部が浸食形成されたもので、南部山丘陵の南麓を天津沢川が、北麓を兎捨川が共に東流して、南の原段丘や北の三本木扇状地と切斷されており、舌状を呈している。

本段丘の東方は標高約40m程の低い平坦な水田地帯で、白石川の沼澤原である。この地域を東北縦貫自動車道および国道4号線と国鉄東北本線が、白石川をはさみながら平行して南西から北東方向に走っている。



第1図 三部山遺跡の位置

第2図 周辺の道路



## II 周辺の遺跡と環境

三部山遺跡の所在する長袋段丘は、白石盆地のほぼ中央に近い西縁部に位置している。

白石盆地は、白石・官（蔵王町）・円田（蔵王町）を結ぶ南南西 北北東の方向に長さ約23km、平均幅約2km程の細長い盆地で、この地方の主要な居住地域および農耕地帯となっている。

白石地方の遺跡は、盆地西縁部の段丘や扇状地上に多く、特に盆地南半部に集中的にみられる。近年東北縦貫自動車道開通遺跡として発掘調査が行なわれた、菅生川遺跡、青木遺跡、松田遺跡、家老内遺跡、二屋敷遺跡などは、こうした段丘上に位置している遺跡である。

長袋段丘は、南を天津沢川、北を見捨川によって切斷された東西約1km、南北約800m程の舌状を呈している。段丘は東縁部から南縁部にかけては、やや高くなっている。東縁には、水田面よりの比高約35m程の段丘崖がみられ、西方の段丘基部と北方に向って、ゆるく傾斜している。

このやや高まった東縁から南縁部は、段丘全体の約三分の一をしめ、山林および畠地が多く、三部山遺跡、田上遺跡、下神明遺跡などが所在する。

南部山丘陵麓の段丘基部から中央部および北縁部にかけては、平坦な地域で、全体の三分の一をしめており、住居地や水田地帯になっている。川子屋敷遺跡、上神明遺跡、馬場A・B遺跡等は北縁部に位置し、宅地周辺の畠地から遺物が採集されている。この北縁部は段丘崖を形成せず、ゆるく傾斜をみせながら児捨川氾濫原の水田地帯に接続している。

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	地質	時代	出土品
1 1 2	02325	三部山遺跡	長袋・三部山	段丘	包含地	畠地 山林	縄文（早・前 期）	縄文土器（沈線文・条痕文 ・網文（織維入） 石器、スクレバー、磨石
3	02044	向山遺跡	～・向山	～	～	畠地 墓地	縄文	石器、石點、石斧
4	02043	田上遺跡	～・田上	～	～	畠地	～	縄文土器（織維入） 石器、石點
5		河原沢遺跡	～・河原沢	丘陵麓 斜面	～	～	～	スクレバー
6	02041	小森遺跡	～・小森	～	～	畠地	縄文・奈良・ 平安	石器、石點、土師器
7	02039	下神明遺跡	～・下神明	段丘	～	～	縄文・奈良・ 平安	スクレバー、 土師器、須恵器
8	02294	鹿野屋敷遺跡	～・鹿野屋敷	段丘 斜面	包含地・ 畠地 鉢 壁	畠地 山林	縄文・奈良・ 平安・中世	スクレバー、土師器
9	02037	馬場A遺跡	～・馬場	段丘	包含地	畠地	縄文	スクレバー
10		馬場B遺跡	～・～	～	～	～	～	スクレバー、石器
11	02038	上神明遺跡	～・上神明	～	～	～	縄文・奈良・ 平安	石器、土師器、須恵器
12		田子屋敷遺跡	～・田子屋敷	～	～	～	縄文	石器

〈遺跡番号は宮城県遺跡地名表記載の番号である〉

### III 遺跡の植物

#### 1 白石周辺の植生

1 「中緑の葉が照るタブノキやカシ類の繁る常緑樹林は、暖帯地方を故郷として、暖温帯の三陸沿岸南部までみられる。また、春秋の葉の変化がより多彩なブナの繁る夏緑広葉樹林は、冷温帶地方を故郷として、県内では東北山地の中腹に広がっている。

この遺跡を含む白石地方の丘陵地帯は、2つの樹林帯のちょうど移行部にあたる。

この地方は、人間が住みつく前の原生林として、また、このまま何十年も何百年も人の手を加えないでおいてできる極相林として、モミーイヌブナ林が主役とされている。今では、そうした自然の名残りをとどめているモミ林は、沖の沢、傑山寺、小久保平、入山などでしかみることができなくなった。ほとんどの緑は、モミ林が破壊された後、二次的に成立したコナラーキリ林やアカマツ林、あるいはスギ、アカマツ、ヒノキなどの植林からなっている。

この遺跡を調査した時の植生は、アズマネザサーフジ群落であった。以前はコナラーキリ林だったのが、1976年春に伐採され、その後約半年たって現在の植生が成立したのである。

#### 2 遺跡の植生概観

遺跡の植生をつかむために、 $2 \times 2 \text{ m}^2$  の調査区を 5ヶ所設けた。そして調査区内に生えている種類を明らかにし、それぞれの植物についてブラウンープランケアの総合判定法によって評価した。

優占度と評価値は、次の通りである。

優占度	表面を覆う割合	評価値
5	75~100%	87.5
4	50~75%	62.5
3	25~50%	37.5
2	5~25%	17.5
1	5%以下	5.0
+	極めて低い	1.0

また、調査の結果は組成表に示してある。

遺跡全域から採取・観察された植物は 156 種類にものぼる。5つの調査区内には、その約 44 % にあたる 69 種類が確認できた。

それらの中で最も優占的にみられるのは、アズマネザサである。“東国楓芭”は和名からも

わかるように関東～東北地方に広く分布し、原野や雑木林の伐採後によく群落をつくる。遺跡に接する小墓地には、コナラークリの林分が残っている（写真3、4）が、アズネザサはさほど目立たない。それが遺跡では優占度3～5でほとんど全域に生えていることから、春に伐採した後、急に繁茂したことがわかる。

伐採前、コナラークリ林を構成していた樹木は、その切り株から萌芽を形づくり、小塊状となつてみられる。第1調査区（写真5）のコナラ、ウワミズザクラ、ウメモドキ、第2調査区（写真6）のウメモドキ、マルバアオダモ、イタヤカエデ、第3調査区（写真7）のエゴノキ、ヤマウルシ、第4調査区（写真8）のコナラ、クロウメモドキ、サンショウなどがそうである。調査区外でも、アカシデ（写真11）、イヌシデ（写真12）、ウラジロノキ（写真15）、ハシバミ（写真17）、オトコヨウゾメ（写真23）など、大半の樹木は萌芽を形づくっている。これらの写真をみるとわかるように、萌芽は、切り株から束状～放射状あるいは輪状に生え、葉の大きさが、成木のそれよりも著しく広大となる傾向がある。

これらの萌芽は、年がたつにつれて次第に自然淘汰され、実生のものも加わって、やがて再びコナラークリ林となり、その構成種として生きていくものと考えられる。

ふつう、林の縁や伐採跡地にはよく蔓性植物（藤本）がみられることが多い。ここでは、フジが全域に生えている。林内に生えているフジはかなり長くのび、木にからみついて10mも15mも登っていくが、伐採後のこの遺跡では蔓があまり伸長せず、やはり小塊状になっているのが特徴的だ。

次に、下生植物としては、ヒカゲスゲやタガネソウ、シラヤマギクが比較的多く、タチツボスミレ、タカトウダイなどが全域に点々とみられる。

また、帰化植物のオオアレチノギクやヒメジョオン、オオアワダチソウ、アメリカセンダングサなどは、遺跡の周辺部に小群落をつくっている他は、かなり少ない。量も、種類もある。筆者が調べた大鷹沢全域の帰化率（そこに生えている全種類のうち、帰化植物の種類が占める割合）は10.4%、この遺跡全域では5.8%となる。さらに、遺跡の中央部にあたる5つの調査区内では、69種類中わずか2.9%の2種類であり、著しく少ないとわかる。

このことは、このコナラークリ林が、20～30年毎に伐採される他に人手があまり加わっていないことを意味している。従って、自然度の高い植生だったと言うことができる。

しかし、第5調査区（写真9）の周辺は、帰化植物の有無、多少では判断できないようだ。ここでは、ススキやヨモギが優占する大型草本植物群落がみられる。木の種類が少なく、アズマネザサの他はヌルデやコマツナギなど、わずか数種生えているだけだ。また、下草もミツバフウロ以外はほとんど目につかず、ガガイモやヒルガオの蔓性植物がみられる。

この調査区は、高压送電線の塔に近い所なので、塔の管理のため少なくとも年に1回は刈

組成表

和名	調査区					総合優占度						
	調査面積(m <sup>2</sup> )		1	2	3	4	5					
	最大の高さ(cm)		130	100	200	150	200					
	山規種類数	24	27	19	24	13						
木	アズマネザサ	5	5	5	3	4	7250	ヒカゲスゲ	+	2	4	1602
	ヌルデ	1	5	+			1852	タガキソウ	+	1	1	202
	コナラ	3	+	3			1502	シラヤマギク	+	1	1	202
	ウメモドキ	1	1	+			202	タチツボスマレ	1	+	+	104
	ウワミズザクラ	3	+				752	タカトウダイ	++	+		6
	ツクシハギ	++					4	スキ	1	5	1850	
	サンショウ	+	+				4	ヒメカンスゲ	++			4
	クリ	+	+	+			4	ツリガネニンジン	+	+		4
	マルバアオダモ	++					4	ニガナ	+	+		4
	エゴノキ	2					350	ヤブヘビイチゴ	+	+		4
	クロウメモドキ		1				100	コナスビ	+	+		4
	ワタゲカマツカ	+					2	ヨモギ		4		1250
	イタヤカエデ	+					2	ワレモコウ	1			100
	ノイバラ	+					2	ミツバフウロ		1		100
	ヤマツツジ	+					2	トウヒレン属の一種	+			2
木	カヤ	+					2	オカトラノオ	+			2
	コゴメウツギ	+					2	コバギボウシ	+			2
	コマユミ	+					2	森オオアレチノギク	+			2
	ヤマkulシ	+					2	ヤクシソウ	+			2
	コマツナギ	+					2	ヤマハッカ	+			2
	ツジ	1	3	2	3		1950	ケチヂミザサ	+			2
	ミツバアケビ	+++	+	+	+		8	アキノキリンソウ	+			2
藤	コバノカモメヅル	+	+				4	イヌヨモギ	+			2
	クズ	+	+				4	アオイスミレ	+			2
	アケビ	+					2	ノダケ	+			2
	ノブドウ	+					2	キンミズヒキ	+			2
	スズメウリ	+					2	タニソバ	+			2
	ウスバヤブマメ	+					2	オトギリソウ	+			2
	クマヤナギ	+					2	森ヒメジョオン	+			2
	ガガイモ	+					2	ホタルブクロ	+			2
	ヘクソカズラ	+					2	アキカラマツ	+			2
	ヒルガオ	+					2	イブキボウフウ	+			2
木	ヒヨドリバナ							ヒヨドリバナ	+			2
	オケラ							ネコハギ	+			2
	ドクダミ							ゲンノショウコ	+			2
	ゲンノショウコ											2

$$\text{総合優占度} = \frac{\text{評価値の総和}}{\text{調査区の数}} \times 100$$

り扱われていよう。また、塔を建設する際に、表土が一度廃されているわけだから、木本植物の生育には悪環境となり、成長のはやい大型草本や蔓草の繁茂する植生ができたものと思われる。組成表でもわかるように、他の4調査区とは明らかに区別がつき、最も人間の影響を受けていることがわかる。

### 3 分布上貴重な植物

#### ヤブラン (写真26) *Liriopoe platyphylla* Wang et Tang (ユリ科)

よくやぶに生えて葉がランに似ているところから“葱蘭”という名がある。しかし、ラン科ではなくユリ科である。属名の *Liriopoe* は、ギリシャ神話におけるナルキソスの母、森の精リリオーペに因んだものだ。

本州・四国・九州・台湾に分布し、県内でも南部では各地に生えている。しかし県北ではなく、岩手県境の岩泉町あたりが太平洋側の北限と思われる。日本海側では、秋田県まで分布する。

この遺跡では、南側に比較的多く、初夏から夏にかけて淡紫色の花を穂状につけていた。よく花壇などに植えられているフクリンヤブランは、これの栽培品種である。

#### カラスザンショウ (写真21) *Zanthoxylum ailanthoides* Sied. et Zucc. (ミカン科)

これはもともと落葉高木なのだが、県内では、まだ成木を見たことがない。大和町若畠のカラスザンショウも、この遺跡のそれも、高さ数cmから20cmの雑樹だった。

この木の果実を食べるためにはカラスが集まつてるので“鶴山椒”的名があるが、そういった光景は、関東から南にいかないとみられないだろう。おそらく、鶴の化粧で宮城県にも分布が広げられたものと考えられる。岩手県では、まだ知られていないが、日本海側では青森県まで北上している。

秩父では“やまとり”、伊豆半島では“げたばら”と呼ばれ、昔は下駄材に利用された。角田地方にいくとシンジュ (ニワウルシ属 *Ailanthus*) という木が道端などで目につく。その葉とカラスザンショウの葉がよく似ているので、エングラーは、種名に *ailanthoides* と名づけた。

#### カジカエデ (写真22) *Acer diabolicum* Bunge (カエデ科)

青根温泉から奥々温泉への途中の道路沿いに、高さが15mもあるうと思われるカジカエデがある。こんなに大きいのは、おそらく本県一と思われる。普通県内でみられるのは、せいぜい数mどまりなのだ。分布図でわかるように、藏王山麓や仙台周辺に多く、仙台平野をと

宮城県植物分布図



#### オトコヨウゾメ (写真23) *Viburnum phlebotrichum* Thund. (スイカズラ科)

白石周辺や仙南地方のコナラーカリ林に普通にみられるガマズミ属の落葉低木である。遺跡では点々とみられるが、萌芽のため、ミヤマズミなどと混同しやすい。ガマズミの仲間は実を食べられるものもあるが、オトコヨウゾメの実は、やや扁平でやせているため食用としない。乾いた葉が黒くなることや、花が垂れ下がることでガマズミと区別できる。

本種も日本特産種で、東北地方の太平洋側以南の本州・四国・九州に分布し、北限は、昭和39年7月に柏馬寛吉・大橋広好氏によって採集された唐桑町御崎岬と思われる。

#### フクシマシャジン (写真33) *Adenophora divaricata* Fr. et Sav. (キキョウ科)

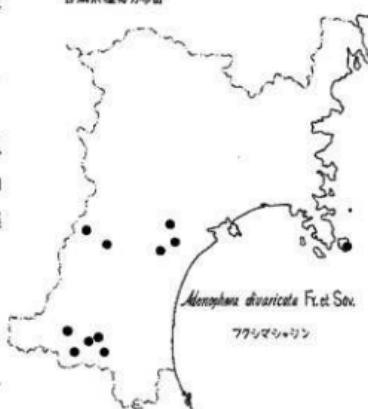
朝鮮、中国及び日本に分布するツツガネニンジン属の植物で、わが国では、本州中北部に

んで牡鹿半島でも各地に生えている。栗駒山系の鬼首周辺が北限と思われる。

本州・四国・九州の山地に生える日本特産のカエデで、葉の形がカジノキに似ているところから“梶楓”的名がある。

遺跡では、わずか1本しか確認していないが、宮城県北限植物の一つとして、貴重である。

宮城県植物分布図



分布が限られている。この遺跡では中部に非常に多く生えているが、南部にはツリガネニンジンが生え、住み分けしていることは興味深い。

本種は、古くはツルシャジンやツルギキョウと呼ばれていたものである。その後、松村任三氏が東京理科大学所蔵標本（福島県産？）に“フクシマシャジン”と手記しておいたものをもとに、牧野富太郎氏が1898年、「日本產つりがねにんじん属の数種」の中でとりあげたのが、この和名のはじめである。

外観はツリガネニンジンとよく似ているが、「がく裂片が開出し、ひ針形で全縁」な点で区別できる。従って、開花前の個体では区別が困難なためか、県内の產地はあまり知られていなかった。最近になって、分布図のように各地に生えていることが明らかになった。

#### その他北限に近い植物

として、コウヤザサ（写真24）*Brachyelytrum japonicum* Hack. ——北限は岩手県宮古・盛岡付近、イヌシデ（写真12）*Carpinus tschonoskii* Maxim. ——北限は岩手県宮古付近、ウラジロノキ（写真15）*Sorbus japonica* (Decne.) Hedl. ——北限は岩手県野田付近、コマツナギ（写真18）*Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. ——北限は、太平洋側は岩手県盛岡付近、日本海側は秋田県などがみられる。

#### 4 遺跡に産する高等植物目録

- 所産植物は、59科156種3変・品種を数えた。そのほとんどは標本として保存してある。
- 学名及び科・種の配列は、主として大井次三郎著「日本植物誌」によった。
- 目録中※印を付したものは、帰化植物（逸出も含む）である。

#### シダ植物 PTERIDOPHYTA

##### ワラビ科 Pteridaceae

- 1 ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn  
var. *latiusculum* (Desv.) Underw.

#### 種子植物 SPERMATOPHYTA

##### 裸子植物 GYMNOSPERMAE

##### イチイ科 Taxaceae

- 2 カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sied. et Zucc.

**マツ科 Pinaceae**

- 3 アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.

**被子植物 ANGIOSPERMAE**

**單子葉植物 MONOCOTYLEDONEAE**

**イネ科 Gramineae**

- 4 アズマネザサ *Arundinaria chino* (Fr. et Sav.) Makino  
 5 ヤマヌカボ *Agrostis clavata* Trin.  
     又カボ var. *nukabo* Ohwi  
 6 コウヤザサ *Brachyelytrum japonicum* Hack.                          写真24  
 7 ハカモガヤ *Dactylis glomerata* L.  
 8 オオエノコログサ *Setaria x pycnocoma* Henr. ex Nakai  
 9 メヒシバ *Digitaria adscendens* (H. B. K.) Henr.  
 10 ナルコビエ *Eriochloa villosa* (Thunb.) Kunth  
 11 ケチヂミザサ *Oplismenus undulatifolius* (Ard.) Roem. et Schult.  
 12 ススキ *Miscanthus sinensis* Anderss.

**カヤツリグサ科 Cyperaceae**

- 13 ヒメカンスゲ *Carex conica* Boott  
 14 ヒカゲスゲ *C. lanceolata* Boott  
 15 タガネソウ *C. siderosticta* Hance

**ツユクサ科 Commelinaceae**

- 16 ツユクサ *Commelina communis* L.

**ユリ科 Liliaceae**

- 17 アオヤギソウ *Veratrum maackii* Regel  
     var. *parviflorum* (Miq.) Hara et Mizushima                          写真25  
 18 コバギボウシ *Hosta albo-marginata* (Hook.) Ohwi  
 19 ヤマユリ *Lilium auratum* Lindl.  
 20 チゴユリ *Disporum smilacinum* A. Gray  
 21 ヤブラン *Liriope platyphylla* Wang et Tang                          写真26

- 22 オオバジャノヒゲ *Ophiopogon planiscapus* Nakai  
23 ジャノヒゲ *O. japonicus* (L. fil.) Ker-Gawl.  
24 サルトリイバラ *Smilax china* L.

ヤマノイモ科 *Dioscoreaceae*

- 25 オニドコロ *Dioscorea tokoro* Makino

ラン科 *Orchidaceae*

- 26 カキラン *Epipactis thunbergii* A. Gray

写真27

双子葉植物 *DICOTYLEDONAE*

離弁花類 *CHORIPETALAE*

ドクダミ科 *Saururaceae*

- 27 ドクダミ *Houttuynia cordata* Thunb.

ヤナギ科 *Salicaceae*

- 28 キツネヤナギ *Salix vulpina* Anders.

クルミ科 *Juglandaceae*

- 29 オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

カバノキ科 *Betulaceae*

- 30 イヌシデ *Carpinus tschonoskii* Maxim. 写真12  
31 アカシデ *C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume 写真11  
32 ハシバミ *Corylus heterophylla* Fischer var. *thunbergii* Blume 写真17

ブナ科 *Fagaceae*

- 33 コナラ *Quercus serrata* Thunb. 写真13  
34 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

ニレ科 *Ulmaceae*

- 35 ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

36 エゾエノキ *Celtis jessoensis* Koidz.

タデ科 *Polygonaceae*

37 タデ属の一種 *Polygonum* sp.

38 タニソバ *P. nepalense* Meisn.

ヒユ科 *Amaranthaceae*

39 ヒナタイノコズチ *Achyranthes fauriei* Lév. et Van.

ナデシコ科 *Caryophyllaceae*

40 ウシハコベ *Stellaria aquatica* (L.) Scop.

41 コハコベ *S. media* (L.) Villars

42 カワラナデシコ *Dianthus superbus* L. var. *longicalycinus* (Maxim.) Williams

キンポウゲ科 *Ranunculaceae*

43 センニンソウ属の一種 *Clematis* sp.

44 アキカラマツ *Thalictrum minus* L. var. *hypoleucum* (Sieb. et Zucc.) Miq.

アケビ科 *Lardizabalaceae*

45 ミツバアケビ *Akebia trifoliata* (Thunb.) Koidz.

46 アケビ *A. quinata* (Thunb.) Decaisne

メギ科 *Berberidaceae*

47 イカリソウ *Epimedium grandiflorum* Morr. var. *thunbergianum* (Miq.) Nakai

モクレン科 *Magnoliaceae*

48 ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb.

写真16

ユキノシタ科 *Saxifragaceae*

49 ウツギ *Deutzia crenata* Sieb. et Zucc.

バラ科 *Rosaceae*

50 コゴメウツギ *Stephanandra incisa* (Thunb.) Zabel

- 51 ヤブヘビイチゴ *Duchesnea indica* (Andr.) Focke  
 52 ナワシロイチゴ *Rubus parvifolius* L.  
 53 ワレモコウ *Sanguisorba officinalis* L.  
 54 キンミズヒキ *Agrimonia pilosa* Ledeb.  
 55 ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb.  
 56 カスミザクラ *Prunus verecunda* (Koidz.) Koehne  
 57 ウワミズザクラ *P. grayana* Maxim.  
 58 ワタケガマツカ *Pourthiae villosa* (Thunb.) Decne.  
 59 ウラジロノキ *Sorbus japonica* (Decne.) Hdl.

写真15

#### マメ科 Leguminosae

- 60 ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz.  
 61 ツクシハギ *Lespedeza homoloba* Nakai  
 62 ネコハギ *L. pilosa* (Thunb.) Sieb. et Zucc.  
 63 ヤハズソウ *Kummerovia striata* (Thunb.) Schindler  
 64 クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi  
 65 ウスバヤブマメ *Amphicarpea edgeworthii* Benth. var. *trisperma* (Miq.) Ohwi  
 66 コマツナギ *Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. 写真18  
 67 フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC.

#### フウロソウ科 Geraniaceae

- 68 ゲンノショウコ *Geranium thunbergii* Sieb. et Zucc.  
 69 ミツバフウロ *G. wilfordii* Maxim.

#### ミカン科 Rutaceae

- 70 サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.  
 71 カラスザンショウ *Z. ailanthoides* Sieb. et Zucc. 写真21

#### ヒメハギ科 Polygalaceae

- 72 ヒメハギ *Polygala japonica* Houtt.

**トウダイグサ科 Euphorbiaceae**

- 73 タカトウダイ *Euphorbia pekinensis* Rupr.

**ウルシ科 Anacardiaceae**

- 74 ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq.

写真20

- 75 ヌルデ *R. javanica* L.

**モチノキ科 Aquifoliaceae**

- 76 アオハダ *Ilex macropoda* Miq.

- 77 ウメモドキ *I. serrata* Thunb.

**ニシキギ科 Celastraceae**

- 78 ニシキギ *Euonymus alatus* (Thunb.) Sieb.

コマユミ form. *ciliatodentatus* (Fr. et Sav.) Hiyama

- 79 ツリバナ *E. oxyphyllus* Miq.

**カエデ科 Aceraceae**

- 80 ヤマモミジ *Acer palmatum* Thunb. var. *matsumurae* (Koidz.) Makino

- 81 イタヤカエデ *A. mono* Maxim.

- 82 カジカエデ *A. diadolicum* Blume

写真22

**クロウメモドキ科 Rhamnaceae**

- 83 クマヤナギ *Berchemia racemosa* Sieb. et Zucc.

**ブドウ科 Vitaceae**

- 84 エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* (Regel) Nakai

- 85 ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.

**オトギリソウ科 Guttiferae**

- 86 オトギリソウ *Hypericum erectum* Thunb.

写真31

**スミレ科 Violaceae**

- 87 アオイスマレ *Viola hondoensis* W. Becker et H. Boiss.  
88 アカネスマレ *V. phalacrocarpa* Maxim.  
89 タチツボスマレ *V. grypoceras* A. Gray

**アカバナ科 Onagraceae**

- 90 アカバナ *Epilobium pyrricholophum* Fr. et Sav.

**ウコギ科 Araliaceae**

- 91 タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann  
92 ヤマウコギ *Acanthopanax spinosus* (L. fil.) Miq. 写真14  
93 ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai. 写真19

**セリ科 Umbelliferae**

- 94 ミツバ *Cryptotaenia japonica* Hassk.  
95 カノツメソウ *Spuriopimpinella calycina* (Maxim.) Kitagawa 写真30  
96 イブキボウフウ *Seseli libanotis* Koch var. *japonica* H. Boiss. 写真28  
97 ノダケ *Angelica decursiva* (Miq.) Fr. et Sav.

**合弁花類 GAMOPETALAE**

**イチヤクソウ科 Pyrolaceae**

- 98 イチヤクソウ *Pyrola japonica* Klenze

**ツツジ科 Ericaceae**

- 99 ヤマツツジ *Rhododendron kaempferi* Planch.  
100 レンゲツツジ *R. japonicum* (A. Gray) Suringer

**サクラソウ科 Primulaceae**

- 101 コナズビ *Lysimachia japonica* Thunb.  
102 オカトラノオ *L. clethroides* Duby

**エゴノキ科** *Styracaceae*

- 103 エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.

**モクセイ科** *Oleaceae*

- 104 イボタノキ *Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc.

- 105 マルバアオダモ *Fraxinus sieboldiana* Blume

**リンドウ科** *Gentianaceae*

- 106 リンドウ *Gentiana scabra* Bunge var. *bucrgeri* (Miq.) Maxim.

**ガガイモ科** *Asclepiadaceae*

- 107 ガガイモ *Metaplexis japonica* (Thunb.) Makino

- 108 コバノカモメヅル *Cynanchum sub lanceolatum* (Miq.) Matsum.

**ヒルガオ科** *Convolvulaceae*

- 109 ヒルガオ *Calystegia japonica* Choisy.

**ムラサキ科** *Boraginaceae*

- 110 ホタルカズラ *Buglossoides zollingeri* (DC.) Johnston

**クマツヅラ科** *Verbenaceae*

- 111 ムラサキシキブ *Callicarpa japonica* Thunb.

写真10

**シソ科** *Labiatae*

- 112 ウツボグサ *Prunella vulgaris* L. var. *lilacina* Nakai

- 113 イヌコウジュ *Mosla punctulata* (J. F. Gmel.) Nakai

- 114 ネシソ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *crispa* (Thunb.) Deane  
form. *viridis* (Makino) Makino

- 115 ヤマクルマバナ *Clinopodium chinense* (Benth.) O. Kuntze  
var. *shibetensis* (Lévl.) Koidz.

- 116 ヤマハッカ *Plectranthus inflexus* (Thunb.) Vahl, ex Benth.

ナス科 Solanaceae

- 117※トマト *Lycopersicon esculentum* Mill.

ハエドクソウ科 Phrymaceae

- 118 ナガバノハエドクソウ *Phryma leptostachya* L. var. *asiatica* Hara  
form. *oblongifolia* (Koidz.) Ohwi

オオバコ科 Plantaginaceae

- 119 オオバコ *Plantago asiatica* L.

アカネ科 Rubiaceae

- 120 ヘクソカズラ *paederia scandens* (Lour.) Merrill var. *mairei* (Lév.) Hara 写真29  
121 アカネ *Rubia akane* Nakai

スイカズラ科 Caprifoliaceae

- 122 ガマズミ *Viburnum dilatatum* Thunb.  
123 ミヤマガマズミ *V. wrightii* Miq.  
124 オトコヨウゾメ *V. phlebotrichum* Sieb. et Zucc. 写真23  
125 ツクバネウツギ *Aberia spathulata* Sieb. et Zucc.  
126 ヤマウグイスカグラ *Lonicera gracilipes* Miq.

キキョウ科 Campanulaceae

- 127 ツリガネニンジン *Adenophora triphylla* (Thunb.) A. DC.  
var. *japonica* (Regel) Hara 写真34  
シロバナツリガネニンジン form. *leucantha* Hara  
128 フクシマシャジン *A. divaricata* Fr. et Sav.  
129 ホタルブクロ *Campanula punctata* Lam.

写真34

写真35

ウリ科 Cucurbitaceae

- 130 スズメウリ *Melothria japonica* (Thunb.) Maxim.

写真36

キク科 Compositae

- 131 ハハコグサ *Gnaphalium affine* D. Don.
- 132 サジガンクビソウ *Carpesium glossophyllum* Maxim.
- 133 ヒヨドリバナ *Eupatorium chinense* L. var. *simplicifolium* (Makino) Kitam. 写真35
- 134 アキノキリンソウ *Solidago virga-aurea* L. var. *asiatica* Nakai
- 135※オオアワダチソウ *S. gigantea* Ait. var. *leiophylla* Fern. 写真37
- 136 ユウガギク *Kalimeris pinnatifida* (Maxim.) Kitam.
- 137※ヒメジョオン *Erigeron annuus* (L.) Pers. 写真38
- 138※オオアレチノギク *E. sumatrensis* Retz. 写真40
- 139 シラヤマギク *Aster scaber* Thunb. 写真32
- 140※ダンドボロギク *Erechthites hieracifolia* (L.) Raf.
- 141※ノボロギク *Senecio vulgaris* L.
- 142 ヤブレガサ *Syneilesis palmata* (Thunb.) Maxim.
- 143 イヌヨモギ *Artemisia keiskeana* Miq. 写真36
- 144 ヨモギ *A. princeps* Pampan.
- 145 コメナモミ *Siegesbeckia glabrescens* (Makino) Makino
- 146※アメリカセンダンゲサ *Bidens frondosa* L. 写真39
- 147 オケラ *Atractylodes japonica* Koidz., ex Kitam.
- 148 ノアザミ *Cirsium japonicum* DC.
- 149 トウヒレン属の一種 *Saussurea* sp.
- 150 タムラソウ *Serratula coronata* L. var. *insularis* (Ijin) Kitam.
- 151 ヤブタビラコ *Lapsana humilis* (Thunb.) Makino
- 152 イワニガナ *Ixeris stolonifera* A. Gray
- 153 ニガナ *I. dentata* (Thunb.) Nakai
- 154 アキノノゲシ *Lactuca indica* L. var. *laciniata* (O. Kuntze) Hara
- 155 オニノゲシ *Sonchus asper* (L.) Hill
- 156 ヤクシソウ *Youngia denticulata* (Houtt.) Kitam.

### 主な参考文献

- 青森県林局 (1935) : 宮城県植物目録
- 岩手植物の会 (1970) : 岩手県植物誌
- 上野雄規 (1974) : 人吉沢の植物誌
- 上野雄規 (1975) : 宮城県におけるフクシマシャジンの分布
- 菅原亀悦 (1969) : 宮城県の植生の概観
- 菅原亀悦 (1973) : 仙台市太白山・佐保山地域の植生
- 望月隆夫 (1972) : 秋田県植物目録
- 結城嘉美 (1972) : 山形県の植物誌
- 吉岡邦二 (1952) : 仙台市附近モミーイヌブナ林地帯の森林
- 大井次三郎 (1975) : 日本植物誌

### 5 考 察

- 1 遺跡の植生は、コナラーカリ林（二次林）を伐採した後に成立した、アズマネザサーフジ群落が主体をなしている。
- 2 木本植物は、ほとんどが萌芽で、束状や放射状あるいは橢状を呈し、フジは蔓が伸長せず小塊状をなすなど、伐採跡地特有の形態を示している。
- 3 繁化率が5.8%と低く、特に遺跡の中央部は2.9%で、丘陵地としては自然度のやや高い植生である。
- 4 遺跡に産する高等植物は59科156種3変品種を数え、中には、ヤブラン、カラスザンショウ、カジカエデ、オトコヨウゾメ、フクシマシャジンなど、分布上貴重な植物が自生している。





写真1　遺跡の南半分

写真2　遺跡の北半分



写真3　遺跡に隣接して残っているコナラ林分



写真4 コナラ林分の林床



写真5 第1調査区



写真6 第2調査区

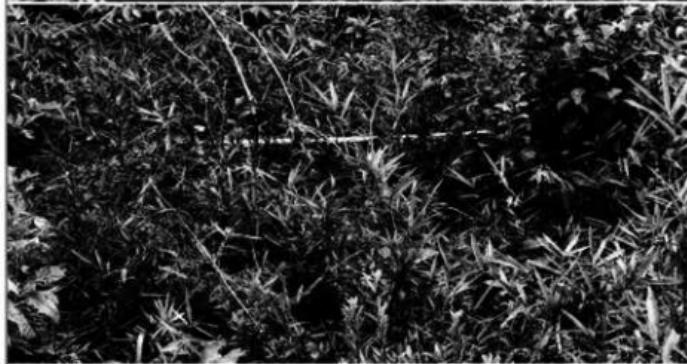


写真7 第3調査区



写真8 第4調査区



写真9 第5調査区



写真10 ムラサキシキブ



写真11 アカシデ





写真12 イヌシデ

写真13 コナラ



写真14 ヤマウコギ





写真15 ウラジロノキ



写真16 ホオノキ

写真17 ハシバミ



写真18 コマツナギ



写真19 ハリギリ



写真20 ヤマウルシ



写真21 カラスザンショウ





写真22 カジカエデ

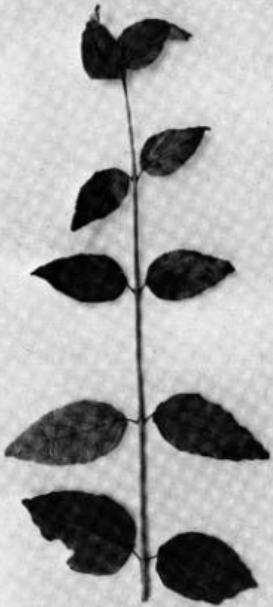


写真23 オトコヨウゾメ

写真24 コウヤザサ

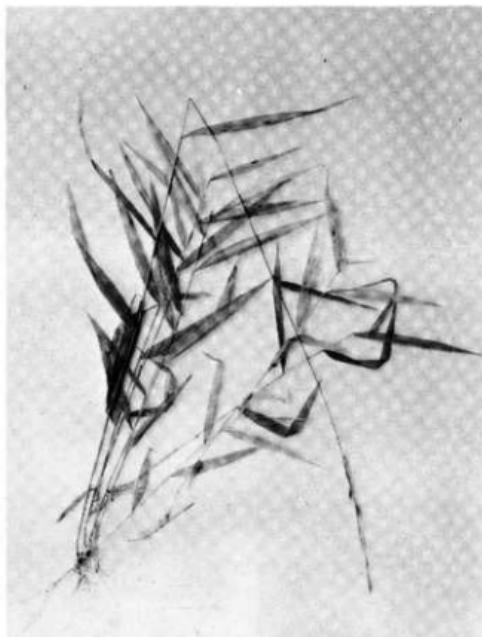


写真25 アオヤギソウ

写真26 ヤブラン



左写真27 カキラン



右写真28 イブキボウフウ



写真29 ヘクソカズラ



写真30 カノツメソウ



写真31 オトギリソウ



左写真32 シラヤマギク



右写真33 フクシマシャジン



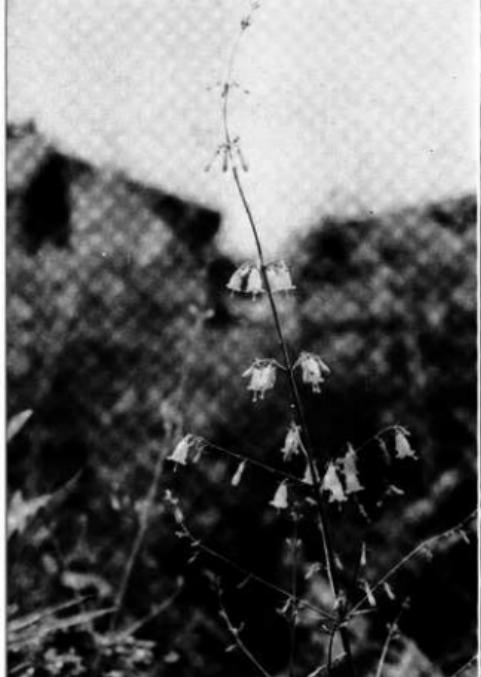


写真34 ツリガネニンジン



写真35 ヒヨドリバナ

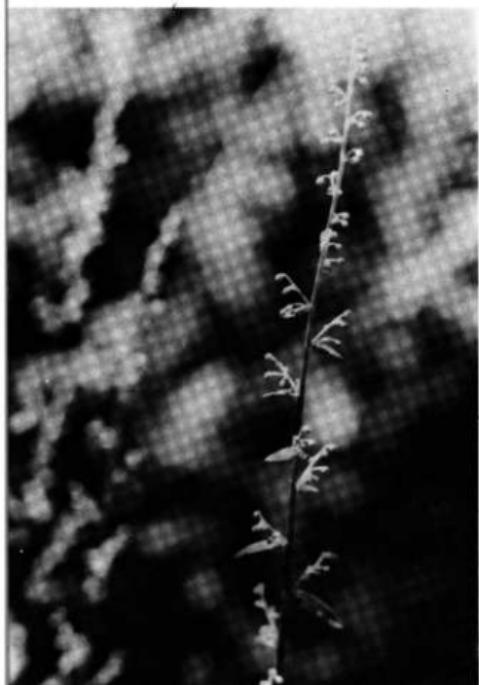


写真36 イヌヨモギ



写真37 オオアワダチソウ（帰化植物）



写真38 ヒメジョオン  
(帰化植物)



写真39  
アメリカセンダングサ  
(帰化植物) の群落



写真40  
オオアレチノギク  
ヒメジョオンの帰化  
植物群落



## IV 調査実施要項と調査日誌

### I. 実施要項

遺跡名 三部山遺跡

遺跡所在地 白石市福岡字長坂三部山

調査の目的 宅地造成のため

調査予定地の面積 2,966m<sup>2</sup>

調査期間 昭和51年8月15日～昭和51年8月31日

調査主体者 白石市教育委員会

調査担当者 白石市文化財保護委員 中橋彰吾

調査指導 宮城県教育庁文化財保護課調査第2係長 斎藤良治

調査員 白石市文化財保護委員 高橋辰男

　　藏王町宮 宮地祐一

　　福島大学 小川淳一

　　東北大学 向子島香

　　" 佐川正敏

調査補助員 東北大学 相原淳一

　　" 川合安

　　東北薬科大学 菊地逸夫

　　福島大学 北爪均

調査参加者 白石高等学校 相原健二、遠藤由一、鈴木知夫、松野茂、太田光雄、

浮田聰、三田村信、山岸秀次、吉田郁夫、吉野隆、

平間和正

名取高等学校 川合雄、向山高等学校 吉田雅之

調査協力者 白石高等学校教諭 居坂知己

白石第一小学校教諭 上野雄規

白石植物愛好会 佐々木敏雄

白石第一小学校教諭 駒板典義

白石市荒星敷 遠藤盛勝

地元協力者 成沢俊博、大槻正行、藤本邦夫、日下義英、佐久間高一郎、高橋孝、

阿部清一、平間圭二、小野恒敬、小野則夫、高橋新太郎、大宮重治、

遠藤良吉、近江養七、高橋阳夫、遠藤勝男、高野英治、大宮玲子、

小野富夫、高野 伝、追木重子、高野たつえ、日下英雄、佐久間良子、  
高野光雄、黒沢よし子、新田惣一郎、佐久間かつ子、高野三男、  
佐久間栄子、大槻信一、佐久間一夫、金井和子

調査連絡事務担当 白石市教育委員会

太齋 亨

小野庵産業KK

金井勝三

## 2. 調査日誌

8月17日 曇り一時雨

調査員3名 補助員4名 作業員10名

テント設営、グリッド設定のち、BA32、BA36、BA38、BA41、BA43グリッドの発掘開始。C区の草刈りも行なう。

8月18日 曇り時々晴れ

調査員3名 補助員4名 作業員17名

BB35、BB37、BB39、BC38、BC41、BD40、BE41グリッドの発掘開始。

8月19日 快晴

調査員4名 補助員4名 作業員15名

BA32、BA41、BA43グリッドは3層(地山)まで完掘し終了する。BB42、BD42グリッドを発掘開始。

8月20日 晴れ、にわか雨

調査員5名 補助員4名 作業員10名

BE27、BE30グリッドの発掘開始。BB39グリッドを精査グリッドとする。BB35、BB42グリッドは完掘。

8月21日 晴れ

調査員5名 補助員2名 作業員9名

斎藤良治氏、視察のため来白。御指導を受ける。BE24、BH24グリッドの発掘開始。BE30グリッド西北隅に2層の上面を切っている性格不明の赤褐色粘土層を検出。

8月23日 晴れ 猛暑

調査員5名 補助員2名 作業員15名

居坂知己氏調査に参加。BA36、BA38、BB37、BE24、BE27グリッドは完掘。C区にトレンチ4本を設定、発掘を開始する。完掘したグリッドの西壁、南壁セクション図作成を開始する。

8月25日 曇り、にわか雨

調査員 5名 補助員 2名 作業員 21名

B F 30、B H 13、B H 16、B H 21、B H 27、B J 28、A A 33、A B 36グリッドの発掘開始。A A 33グリッドを精査グリッドとする。B C 38、B C 41、B D 40、B D 42、B E 41、B H 13、B H 24、B H 27、B J 28グリッドは完掘。C 区は 4 トレンチとも完掘りし、セクション図を作成する。

8月27日 晴れ時々曇り

調査員 4名 補助員 2名 作業員 9名

B G 29グリッドを発掘。赤褐色粘土層は B E 30グリッドから B F 30、B G 29グリッドにかけて堆積している。約半数のグリッドのセクション図作成を終わる。

8月29日 晴れ

調査員 4名 補助員 2名 作業員 7名

B B 39、A A 33グリッドは引き続き精査を続ける。

8月30日 曇り一時雨

調査員 4名 補助員 2名 作業員 5名

B B 39、B H 16、B H 21、A B 36グリッドは完掘。各グリッドのセクション図作成を続ける。

9月1日 曇り時々晴れ

調査員 2名 補助員 1名 作業員 5名

B E 30、B F 30、B G 29グリッドにひろがる赤褐色粘土層の平面図作成後、B F 30の西壁と南壁沿いにトレンチを入れ、後世の盛り土であることを確認する。A A 33グリッドを除いて各グリッドとも完了。撤収を行なう。

9月2日 晴れのち曇り 調査員 2名

A A 33グリッドを完掘りし、調査は終了した。



調査のある日に

## V 調査の方法と概要

調査対象区域のうち、表面観察によって遺物が採集された地点を中心に南北93m、東西36mの範囲に3m×3mのグリッドを設定し、基準杭より東側をA区西側をB区とした。

北斜面のC区については2m×10mのトレンチを4本設定し、第1、第2、第3、第4トレンチとした。

調査対象区域2,966m<sup>2</sup>のうち、A区18m<sup>2</sup>、B区225m<sup>2</sup>、C区80m<sup>2</sup>計323m<sup>2</sup>を発掘した。(第3図) 遺物は原則としてすべてレベルをとり、1.5m×1.5m(四分の一グリッド)を単位として取り上げた。

調査区のA区、B区の現状は雜木林で南北に細長く、全体的な地形は中央部がやや高まり、北に向って傾斜しており、南と西の方向にもいくぶん傾斜をみせる地形である。

C区はA・B区に続く北側の部分で、三部山遺跡全体からみれば北斜面の西の部分にあたり、東西に細長く西に強い傾斜をみせる地形で、現状は畠地である。

A・B区はほとんど全グリッドに、伐採後の大小の根株が残存しており、できるだけ根株をさけながら、B区中央部から調査を開始した。折からの酷暑とともに、根株へのアタックは非常に苦しい作業の連続であった。

A・B区の層序は単純な地層で、基本的にはほとんど変らず、2層で基盤層に達し、各グリッドとも遺物の出土は少なく、フレイク・チップを主として、石器、土器片が若干出土するのみで、遺構および明瞭な遺物包含層は確認されなかった。

B F 30グリッド調査中、赤褐色粘土質土層が第1層と第2層の間にレンズ状に挿入しているのが検出され、隣接するB E 30・B G 29グリッドを精査した結果、挿入土層はやや楕円形に堆積し、その広がりは数グリッドに及んでいる。(第5図) この赤褐色土層より、江戸時代末期と考えられる陶器片が出土した。これは堆積の時代を明示するものであろう。

A区B区の層序は、西壁南壁の計測によると、次の通りである。(第18図・第19図)

第1層 暗褐色シルト層 表上にあたる部分で、草木の根が多量に混入し、ボサボサした粘性の少ない土層である。(15cm~30cm)

第2層 明褐色粘土質シルト層 草木の根が混入しているが、第1層よりも少なく細い。土質は粘性があり、やや堅くしまっているが、木根の周囲は幾分ボサボサする。この層の下部でいくぶん色調が明るくなり、次層との明瞭な色別ができなかったグリッドもある。(5cm~25cm)

第3層 黄褐色粘土層 第2層より粘性が強く、水分を含むとベトつきやすい。輝石安山岩のやや角のとれた礫(径3cm~10cm)を含む基盤層である。

C区の4本の各トレンチの層序も、ほとんど同じで単純であった。遺物は全く出土しない。第2トレンチと第4トレンチの西端部に、第1層と第2層の間に黒色土層（約10cm）が検出され、第4トレンチを拡張精査した結果、黒色土層は幅約1m程で、南北に走っており、畑地間の境界の窪地に、汚染された土が流入堆積したと考えられる。遺物は発見されない。

C区の層序は次の通りである。（第19図）

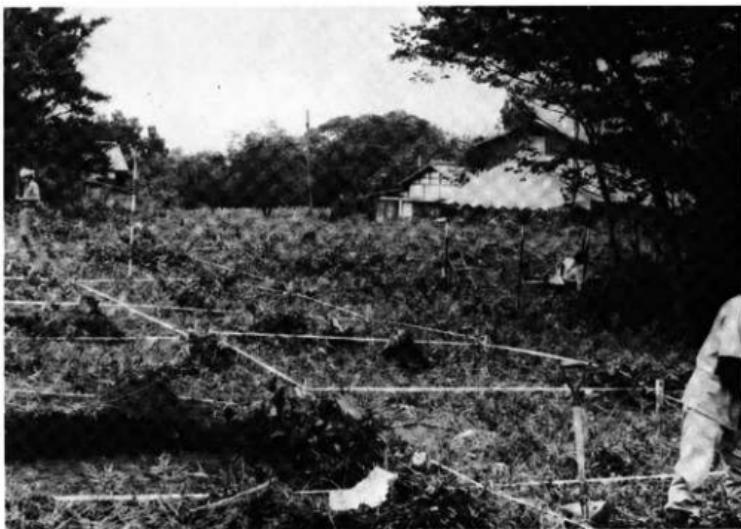
第1層 暗褐色土層 耕土で土質がやや粗く、草木の根が混入している。

第2層 赤褐色土層 やや赤味をおびた粘質のしまった土層

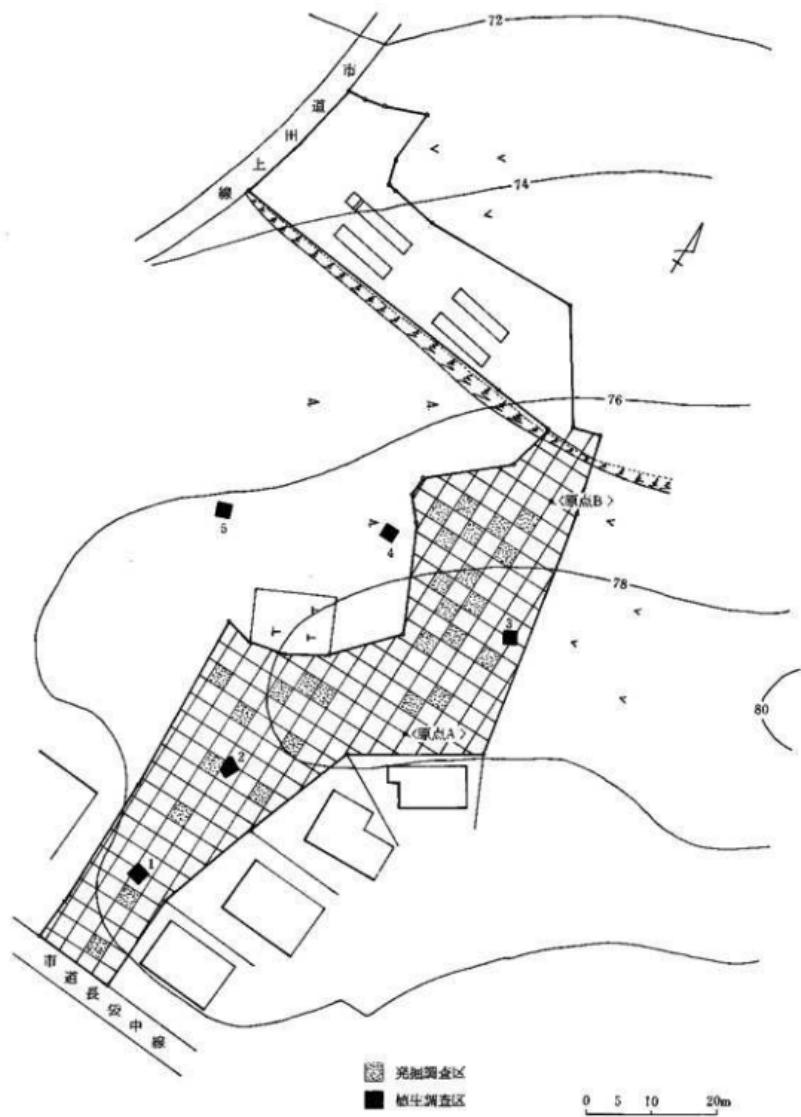
A・B調査区とも遺物の出土は少なかったが、その出土状態を詳細に把握するために、比較的遺物の出土の多い地点に2区の精査グリッドを設定し、全遺物の水平、垂直の分布状況を実測した。（第6図、第7図）

両グリッドとも、チップが最も多く、土器、石器の出土状態はまとまりをもたず、グリッド全域に不整に散布している。層位的にもAA33グリッドは第2層に集中してみられるが、遺物の包含層としては明瞭に把握されなかった。（地表約10cm程は、表土剥離の廃除去されたため、遺物は記録されない）

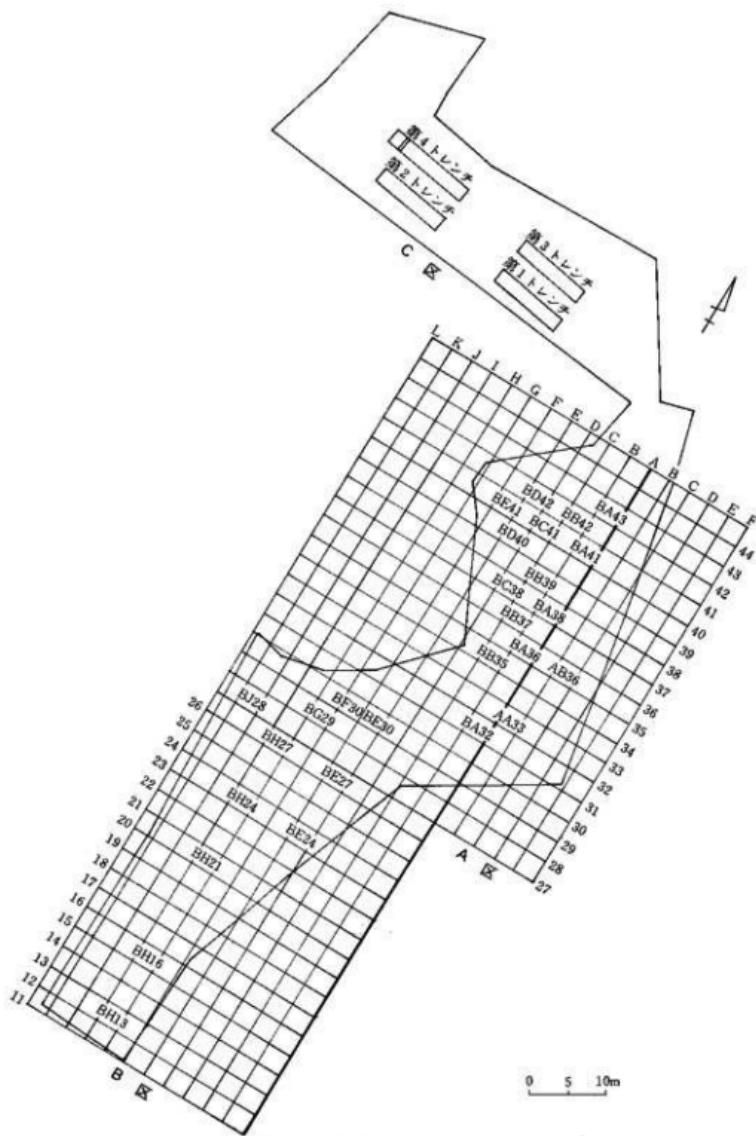
第2層下部には、木炭および焼土の細片がブロック状に検出されたが、堆積はきわめて薄く不整であり、生活面としては確認できなかった。



A·B調査区北からのスナップ

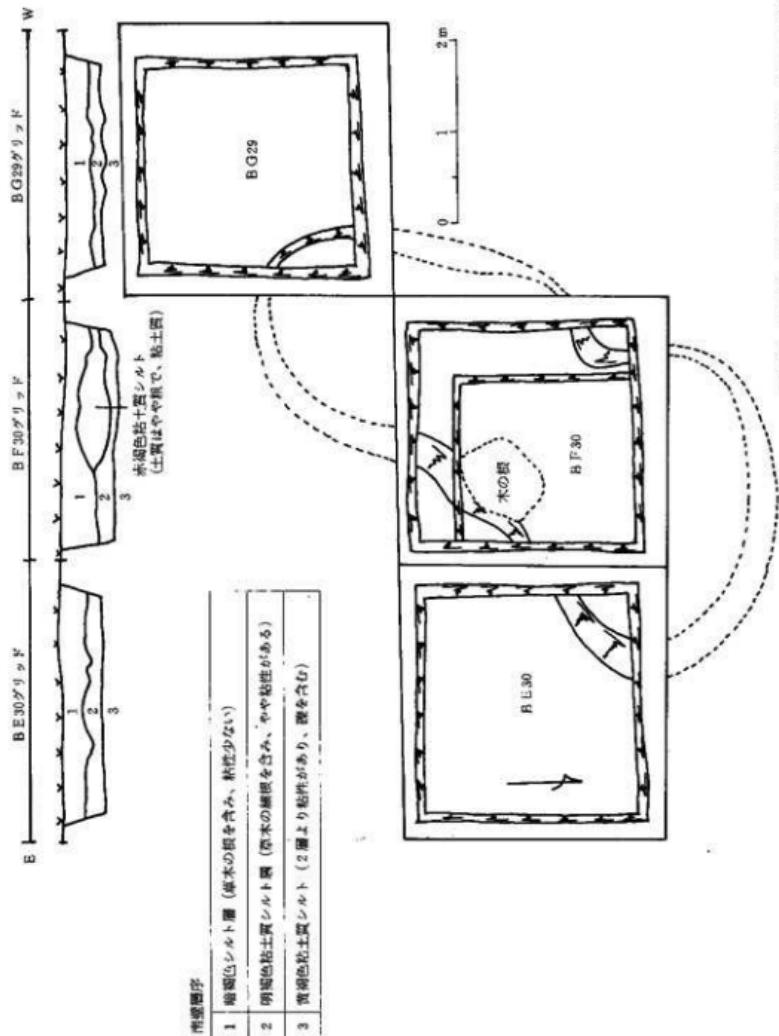


第3図 三部山遺跡地形図



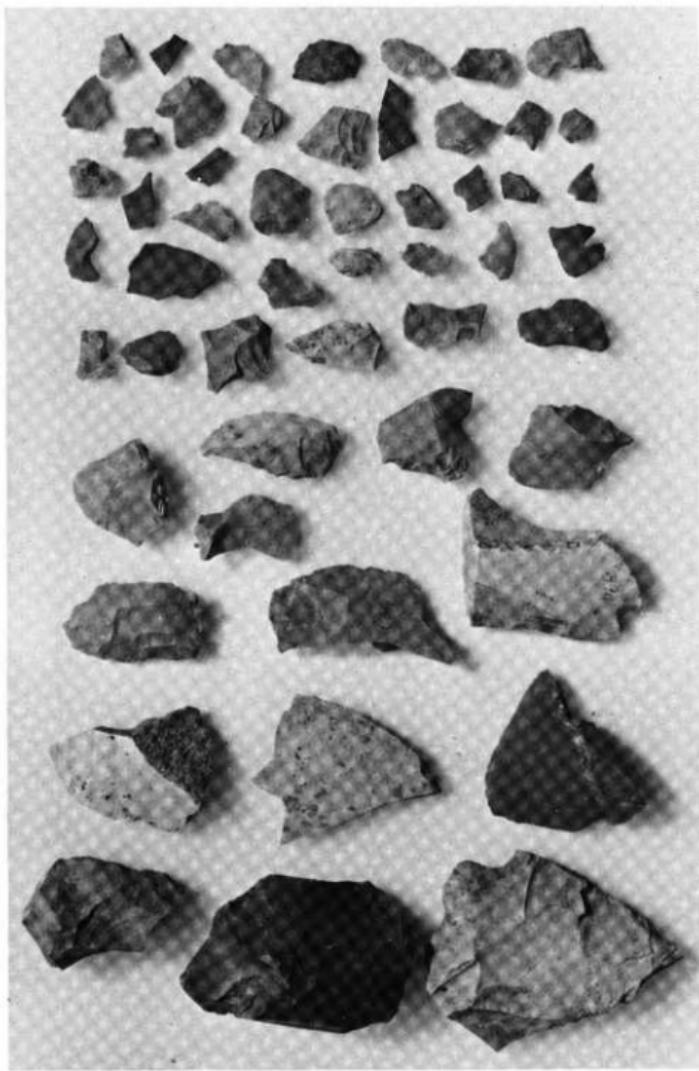
第4図 三郎山造跡グリッド配置図

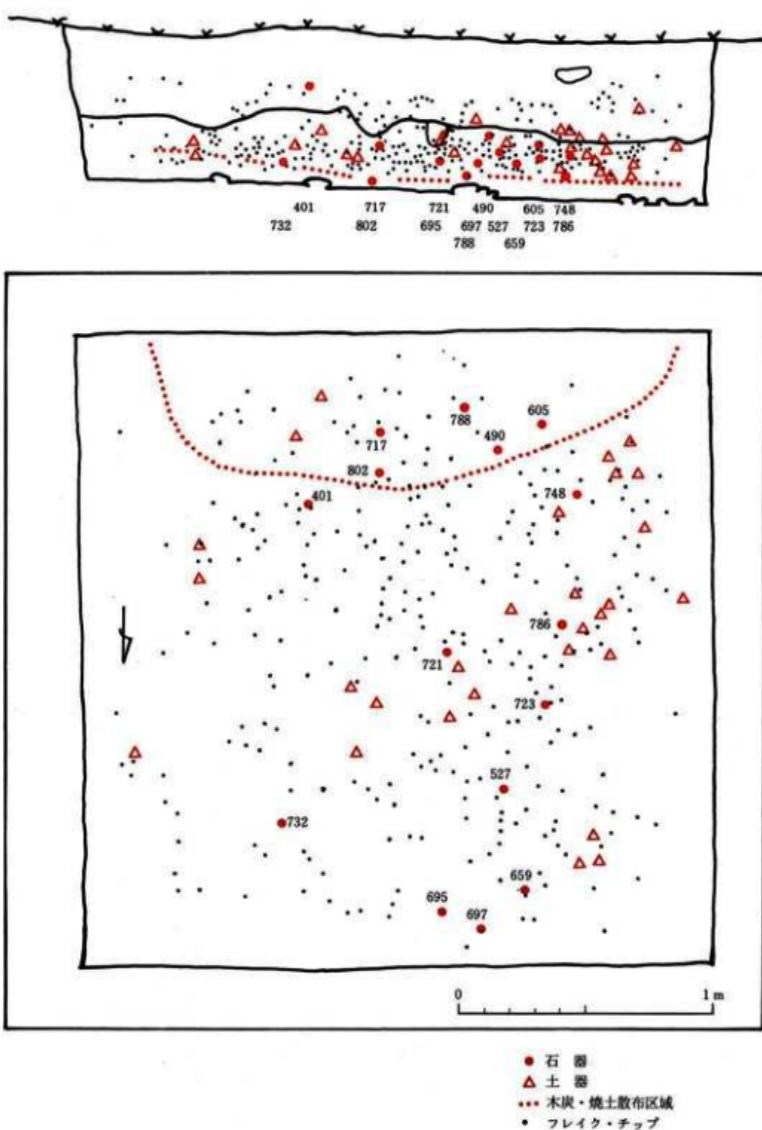
第5図 B E 30・B F 30・B G 29グリッド平面・壁面図



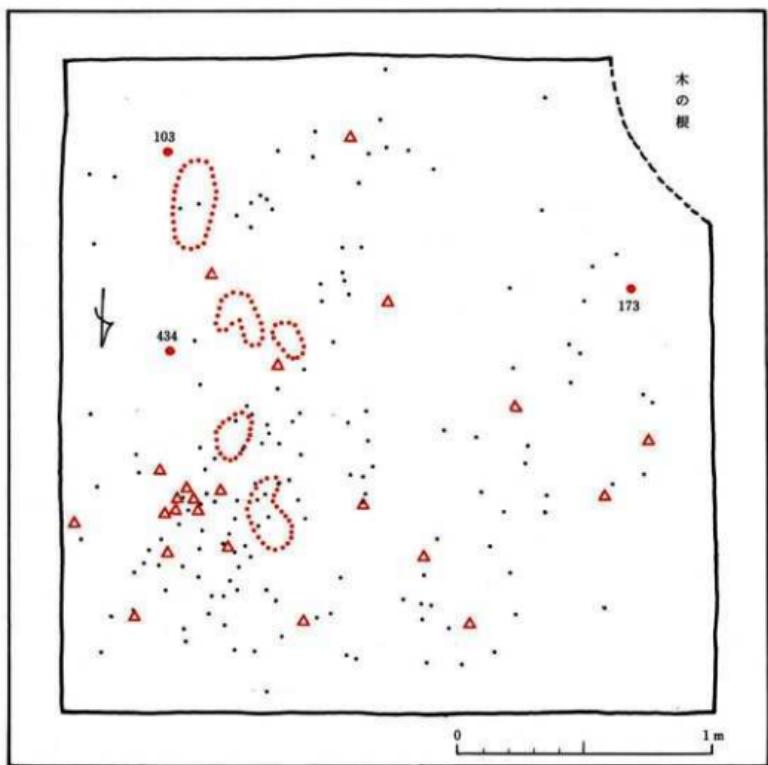
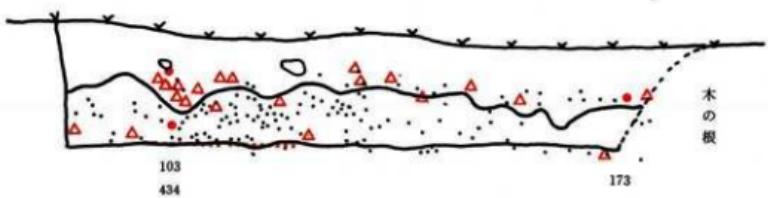


AA33グリッド出土フレイク・チップの一例





第6図 AA33グリッド遺物垂直・水平分布図



- 石器
- △ 土器
- … 木炭・焼土散布区域
- フレイク・チップ

第7図 BB39グリッド遺物垂直・水平分布図

## VI 出土遺物

### 1. 土器

三部山遺跡の調査によって、数量的にいえば 105 点の土器片を採集した。しかし、これらの土器片は細片が多く、器形の全体を知るものはなく、すべては体部破片である。全体的に脆く器面は磨滅していたり、ひび割れの状態で剥落しやすい。文様も不明なものがほとんどで、観察にさえ困難なものが多く、資料として使用できたものは少なかった。

グリッド別の土器片の出土量は次の通りである。

グリッド	層序	数量	資料番号、その他
B F 30	1	2	27、28 (2片共陶器)
B E 30	1~2	8	13、15
B A 32	2	5	10、11、16
A A 33	2	25	1、2、12、14、17、18、23、24、25、木炭・焼土検出
B A 36	2	4	26
A B 36	1~2	9	19、21、木炭検出
B B 37	1~2	12	5、6、9
B C 38	1~2	3	3
B B 39	1~2	24	7、22、木炭・焼土検出
B D 40	1	1	
B E 41	1	7	4
B C 41	2	2	
B A 41	2	2	8
B A 43	1	1	20

※ 資料番号は圓版土器・拓影土器と同一番号である。土器の出土層は第1層下部から第2層にかけてであるが、全体的には第2層出土が多い。

### 沈線文土器 (1、2)

- 1 胎土は微砂質粘土で、細砂を含み焼成は軟質で脆い。繊維はみられず、色調は淡褐色で、器厚は 6 mm 程である。  
文様は浅く横に一条と、斜めに短い沈線が付されている。
- 2 胎土は 1 とほぼ同じようで、焼成は良好で堅い。繊維は含まず、文様は爪形状の浅い沈線が付されている。

### 縄文条痕土器（3、4）

器外側が縄文で、器内面に条痕をもつ土器である。

3. 胎土は微砂質粘土で、繊維と細砂、粗砂を含み、焼成は軟質で吸水性は強い。a、b面ともひび割れしており、非常に脆く、剝落しやすい。

a面は淡褐色で、縄文は単節の斜細文で粗大である。b面は暗褐色で凹凸があり、条痕が付されている。器厚は9mm程である。

4はa面に縄文がみられるが、b面は磨滅して文様は不明であるが、胎土、焼成からみて条痕か擦痕が付されていたと考えられる。

### 羽状縄文土器（5、6、7、8、9、10）

胎土に繊維を含み、粗大な結束のない羽状の縄文  $\{ \overset{\text{L}}{\underset{\text{R}}{\text{L}}} \}$  が付されている。

5. 胎土は繊維を含み、微砂質粘土で、細砂、粗砂をかなり含む。なかには2~3mmの礫もみられる。

a面はb面よりも粗砂や礫の混入量がすくない。b面は凹凸が激しく、かすかに調整の擦痕様のものがみられる。

色調はa面は赤褐色をし、b面は暗褐色で、断面の色調は明瞭な輪状を呈している。

焼成はやや不良で、器厚は9mm程である。

6. 胎土は細砂質粘土で、粗砂をかなり含み、2~3mmの礫もみられる。b面にかすかに擦痕様のものがみられ、繊維の含入量も多い。繊維の方向は擦痕の方向に一致している。

色調はa面が茶褐色をなし、b面には黒褐色もまじる。断面の色調は漸変する。

焼成は良好で、器厚は11mm程である。

7. 胎土は微砂質粘土で、細砂、粗砂を含み、繊維はやや多く、部分的に繊維巣がみられる。

b面は凹凸があり、繊維含入痕が擦痕状を呈している。

色調はa面が赤褐色でb面はいくぶん黄褐色に近く、断面の色調は漸変する。

焼成は良好で、器厚は10mm程である。

9. 胎土は微砂質粘土で、粗砂をやや含み、a面に5~6mm程の礫がみられる。

繊維はやや多く、断面の中心部に繊維巣がみられ、明瞭なサンドイッチ状の構造をなす。

b面にはかすかに調整擦痕がみられる。

色調はa・b面共ほぼ同じような黄褐色である。焼成は不良、器厚は8.5mm程である。

10. 胎土は微砂質粘土で、細砂、粗砂を含むが、b面にはみられず、調整上の使用が考えられる。

繊維の混入が少なく、かすかに擦痕がみられ、繊維の含入痕は擦痕と同方向である。

色調はa・b面がほぼ同色の茶褐色で、断面の中心はやや黒ずむが、色調は漸変するもの

である。

焼成は良好で、器厚は11mm程である。

#### 縄文土器 (11)

11 粗大な単節の鉤繩文で、胎土は微砂質粘土で、細砂、粗砂を含む。繊維は全く合まず、色調はa面は茶褐色、b面はややうすい灰褐色で、断面の色調は漸変する。

焼成は良好で、器厚は9mm程である。

#### 薄手無文土器 (12~19)

胎土は微砂質粘土で、細砂が混入し、かすかに調整の擦度のみえるものもあるが、a、b面ともほとんどがひび割れして、非常に脆くなっている。繊維を多く含み、断面に繊維巣がみられる。

色調は赤褐色や黄褐色で、断面の中心は黒褐色で、明瞭な綱状を呈するものが多い。

焼成は不良で、器厚は4~5mm程の薄手の無文土器である。

#### 厚手無文土器 (20~26)

胎土は微砂質粘土で、細砂、粗砂が混入し、少量の繊維を含むものと、検出不能のものがある。

色調は黄褐色(20、21、23、25)赤褐色(22、24)のものがあり、焼成はやや不良である。器厚は7~12mm程の厚手の無文土器である。

#### 陶器 (27、28)

27、28とも、高台を有する底部のみで、全体の器形を知るものはない。釉はやや青味をおびたなまこ釉がかけられている。

##### 注

土器の胎土の粒径区分は日本農学会法によった。

堆積上の粒径区分については、一般的には国際土壤学会法(Atterberg)が用いられているが、三郎山遺跡出土の土器の胎土の区分には、粒径のスケールの幅がせまく、粘土のスケールの幅の広い日本農学会法によるのが適当と考え、この区分を使用した。

構成粒子は礫、粗砂、細砂、微砂、粘土の区分にしたがったが、これらのうち計測できる粒子はごくわずかで、実際にはほとんど不可能に近い。そこで一応の目安として、碎いてみてサラサラしたものを細砂質粘土、粉状またはほこり状となるものを微砂質粘土とした。

2 0.25 0.2 0.05 0.02 0.01 0.002					mm	
国際法	石	粗砂	細砂	微砂	粘土	
農学会法	礫	粗砂	細砂	微砂	粘土	

昭37・菅野一郎編・「日本の土壤型」より

## 2 石 器

石器は44点出土した。石鎚、石匙、石錐、尖頭器、石箒、およびいわゆる不定形石器である。多数をしめるのは不定形石器であるが、尖った部分を持つもの、厚い刃部を持つもの、薄い刃部を持つもの、およびそれらの組合せがあり、単純ではない。

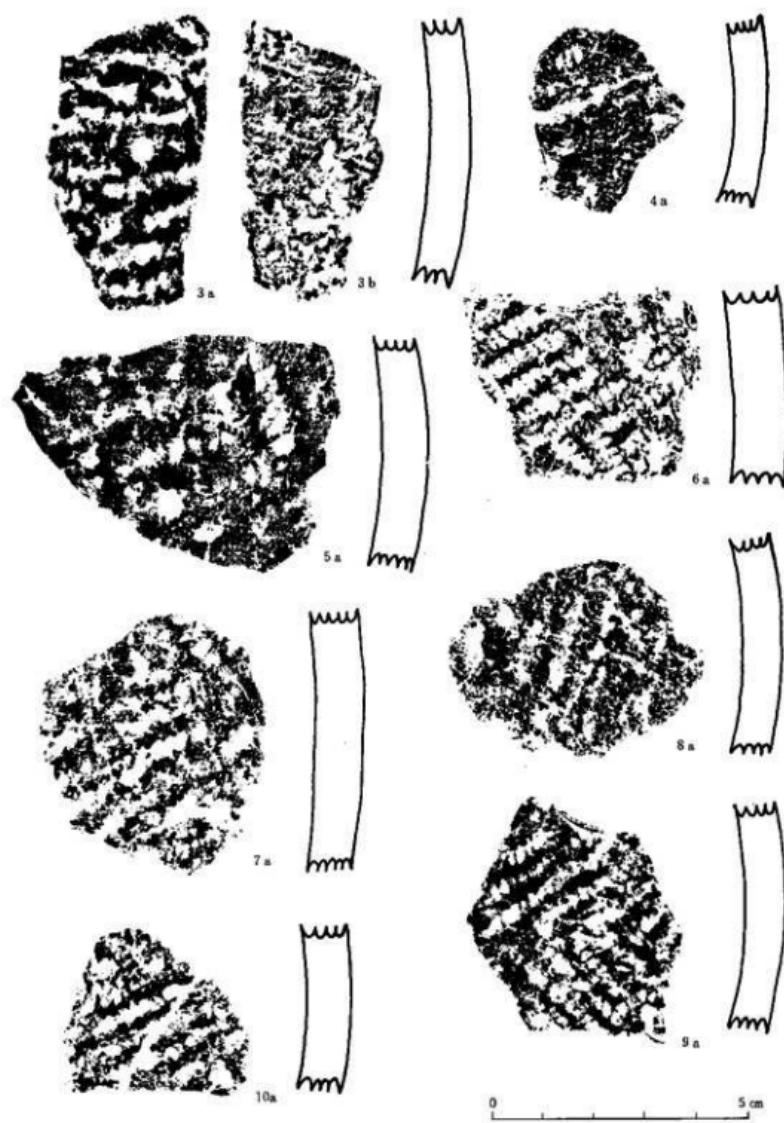
以下、全点を実測図に示し、解説する。

なお、フレイク・チップについては未だ整理が済んでいないため割愛する。

### 注 計測の基準

長さ 主として形態より長軸を想定し、石器の上下端から、長軸におろした2つの垂線の足間の距離。

幅・厚さ 長軸に直交する線の実長のうち最大のもの。

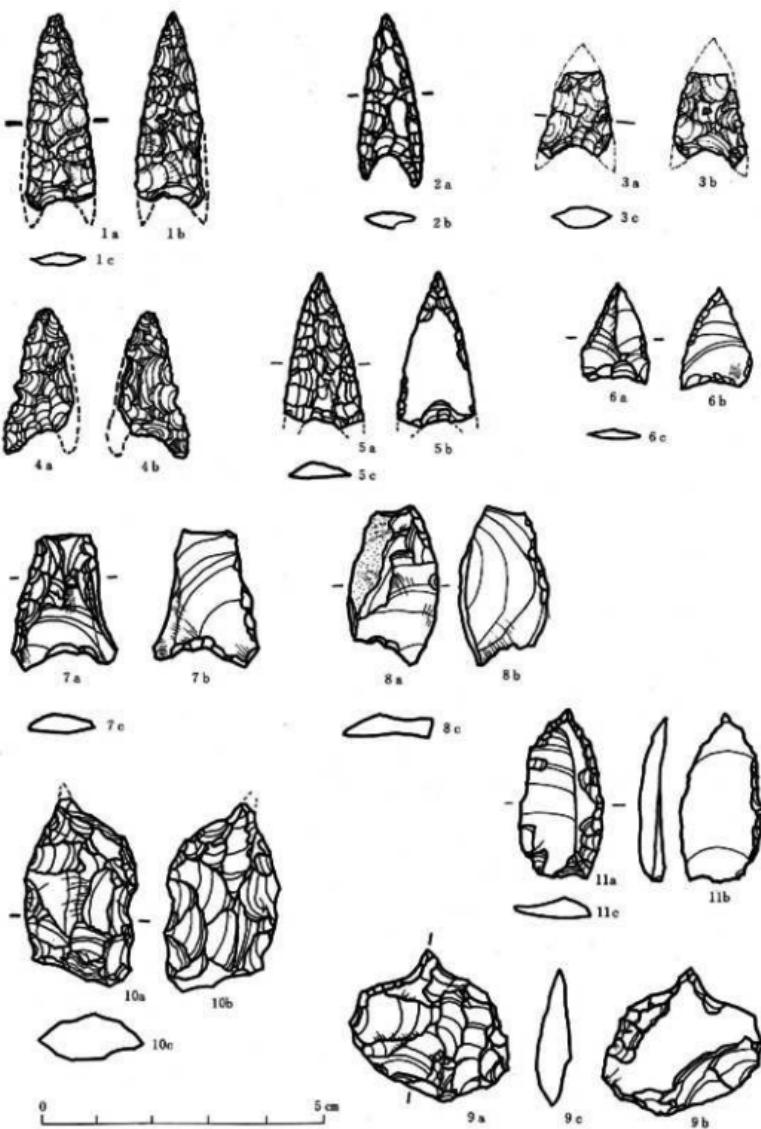


第8図 土器拓影図

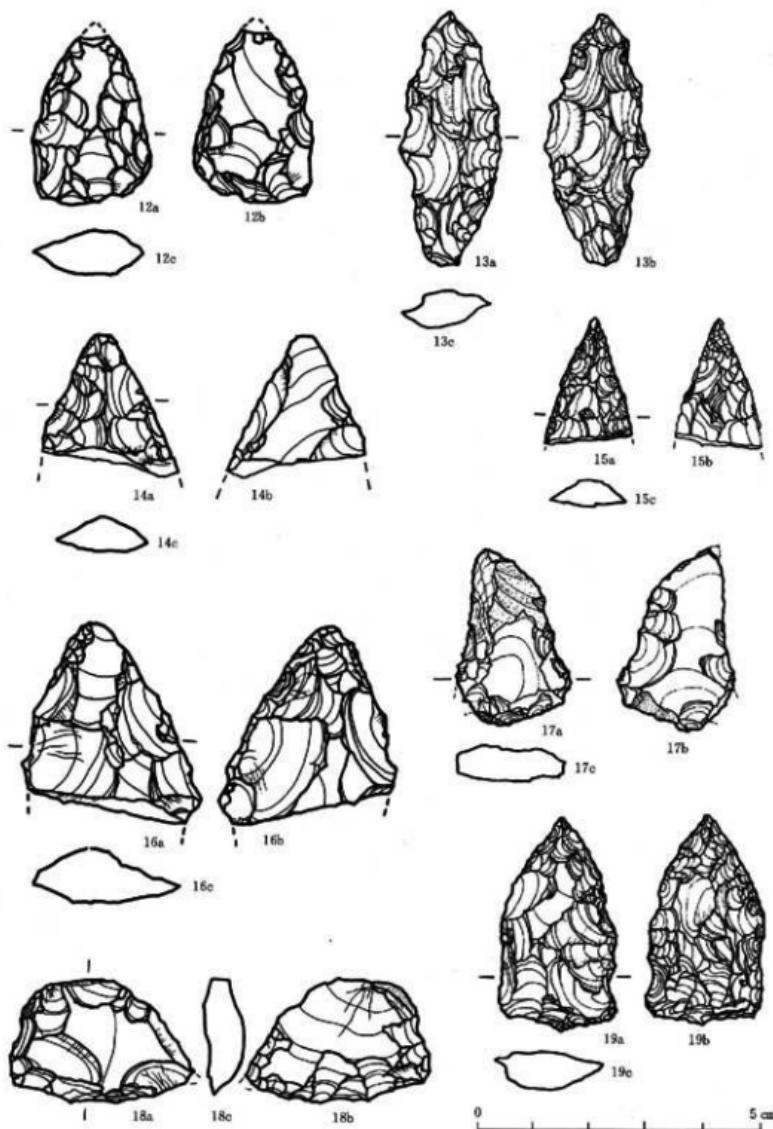
## 第9回 石器の計測結果

測定番号	測定箇所	出ツリッド	標位	石質	大きさ	幅	厚さ	重さ
		mm	mm	mm	mm	mm	mm	g
1	(280)	B/H21	2	塊状	0.05	(12)	3	(1.4)
2	346	A/B35	1	チャート	30	11	3	(1.1)
3	159	B/D40	2	塊状	0.05	(17)	4	(0.8)
4	341	B/F39	1	塊状	0.05	(10)	3	(1.0)
5	73	B/A32	2	塊状	0.05	(27)	3	(1.0)
6	723	A/A33	2	チャート	17	12	3	0.5
7	748	A/A33	2	チャート	23	17	3	1.3
8	788	A/A33	2	チャート	28	15	4	1.7
10	697	A/A33	2	塊状	0.05	(30)	8	5.4
9	30	B/A32	2	チャート	25	26	7	4.1
11	619	B/A41	1	塊状	0.05	(30)	14	4
12	634	B/B39	2	チャート	0.05	(26)	20	8
13	401	A/A33	1	塊状	0.05	(30)	18	8
14	732	A/A33	2	チャート	0.05	(24)	24	(2.9)
15	94	B/A32	2	塊状	0.05	(15)	10	(1.2)
16	90	B/E1	1	塊状	0.05	(37)	10	5.1
17	173	B/B39	2	チャート	33	20	5	(2.9)
18	695	A/A33	2	塊状	0.05	(25)	21	7
19	659	A/A33	2	チャート	0.05	(37)	21	8
20	721	A/A33	2	塊状	0.05	(28)	12	6
21	154	B/A36	2	塊状	0.05	(22)	6	(3.7)
22	690	A/A33	2	塊状	0.05	(34)	25	6
23	527	A/A33	2	チャート	0.05	(21)	6	(3.1)
24	70	B/A32	2	塊状	0.05	(32)	24	7
25	259	B/E30	2	塊	0.05	(25)	22	6
26	18	B/A32	1	塊状	0.05	(12)	10	4
27	287	B/E32	1	塊状	0.05	(41)	26	5
28	786	A/A33	2	塊状	0.05	(36)	16	7
29	103	B/B39	1	チャート	0.05	(21)	6	(4.2)
30	695	A/A33	2	チャート	0.05	(20)	6	(6.0)
31	93	B/A32	2	瓦	0.05	(36)	27	10
32	3	A/A33	2	塊状	0.05	(36)	7	3.9
33	154	B/A36	2	塊状	0.05	(30)	14	(4.6)
34	801	A/A33	2	塊状	0.05	(38)	15	43.0
35	800	表皮	塊状	0.05	(37)	41	16	34.0
36	340	B/F30	1	チャート	51	35	15	35.1
37	3	表皮	チャート	0.05	(36)	30	10	22.5
38	25	B/A32	2	チャート	51	36	10	19.5
39	152	B/B37	2	瓦	0.05	(38)	15	39.5
40	54	B/A33	1	塊状	0.05	(47)	29	11
41	717	A/A33	2	磚瓦	0.05	(30)	32	18
42	241	B/F30	1	磚瓦	0.05	(84)	31	21.7
43	2	B/A32	1	磚瓦	0.05	(133)	65	34
44	1	B/A36	1	磚瓦	0.05	(111)	87	35

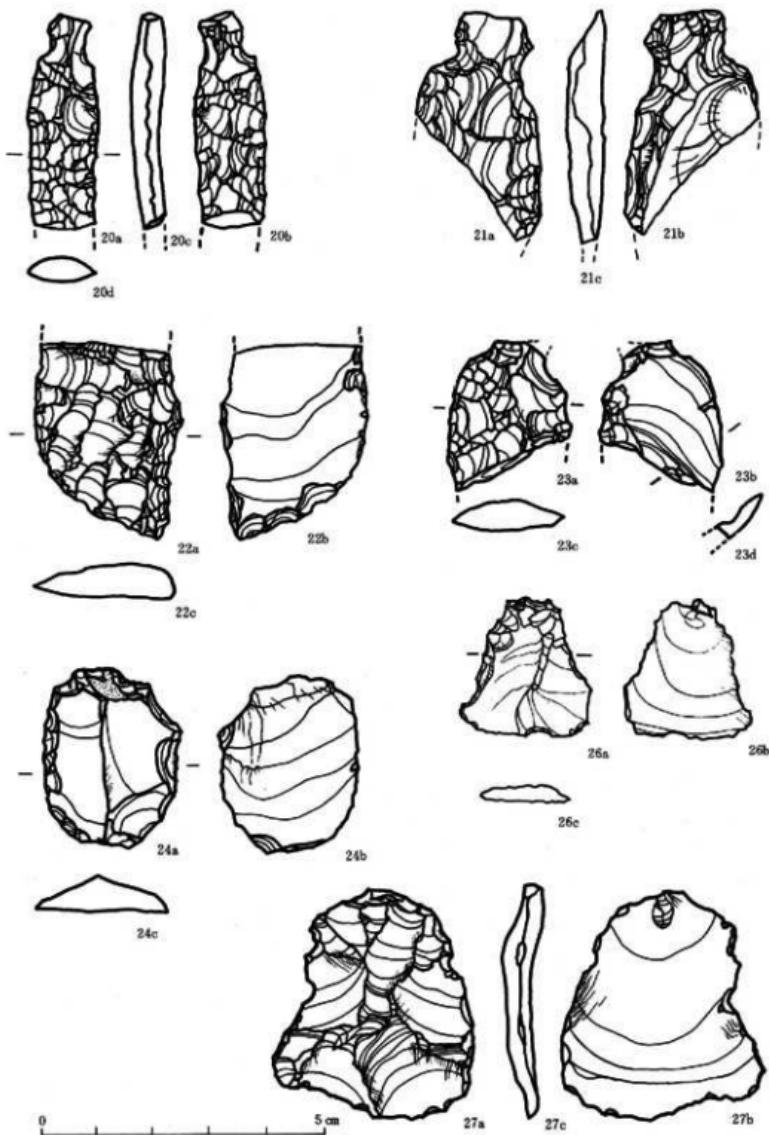
※（ ）は伏石のため、本年の検を下すものではない。



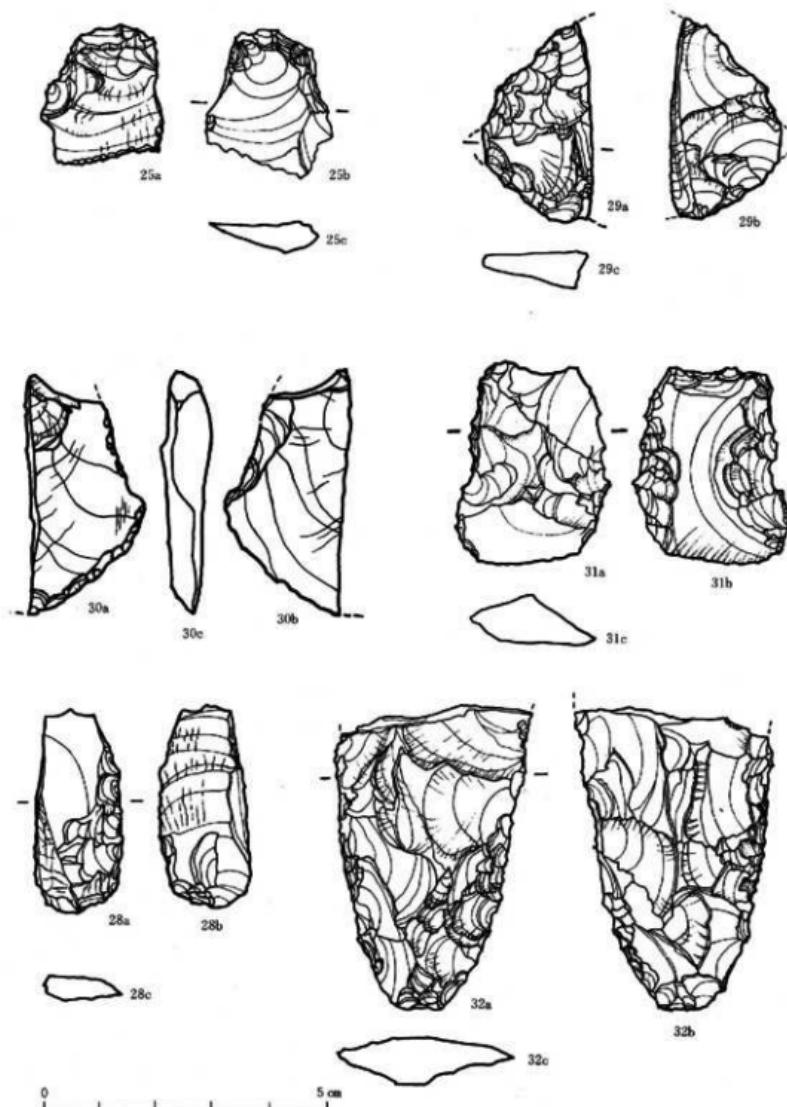
第10図 石器実測図



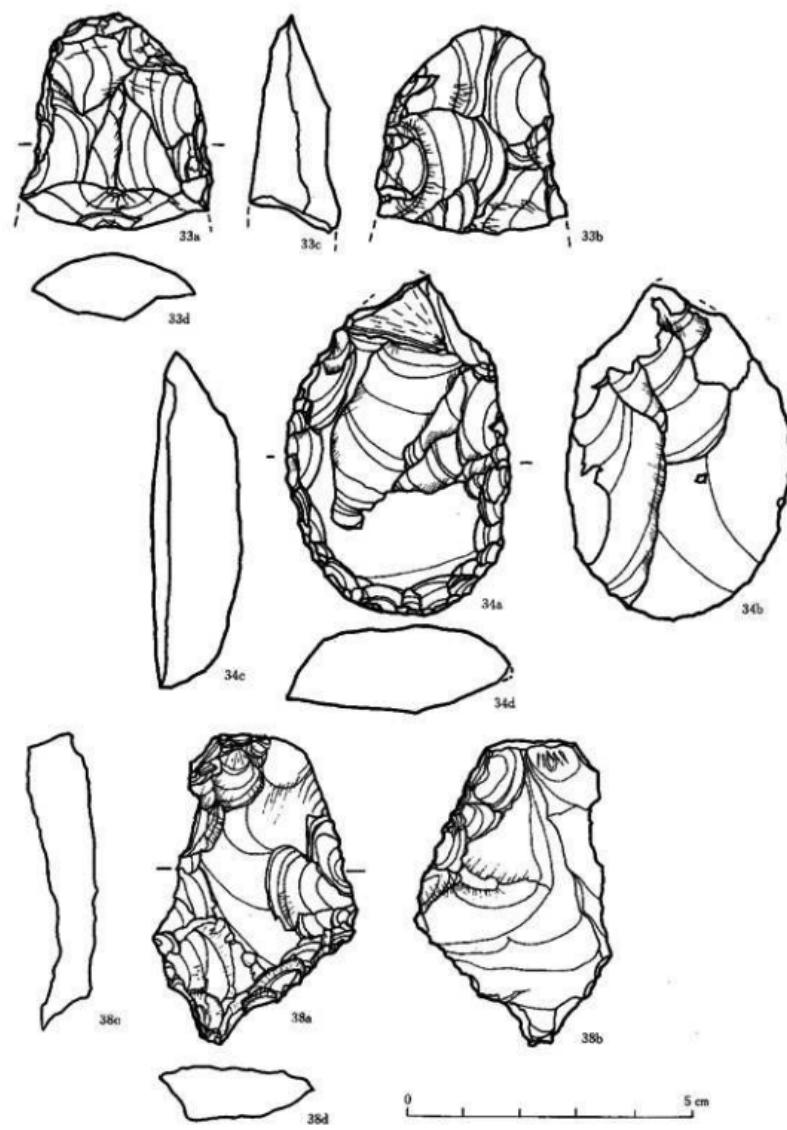
第11図 石器実測図



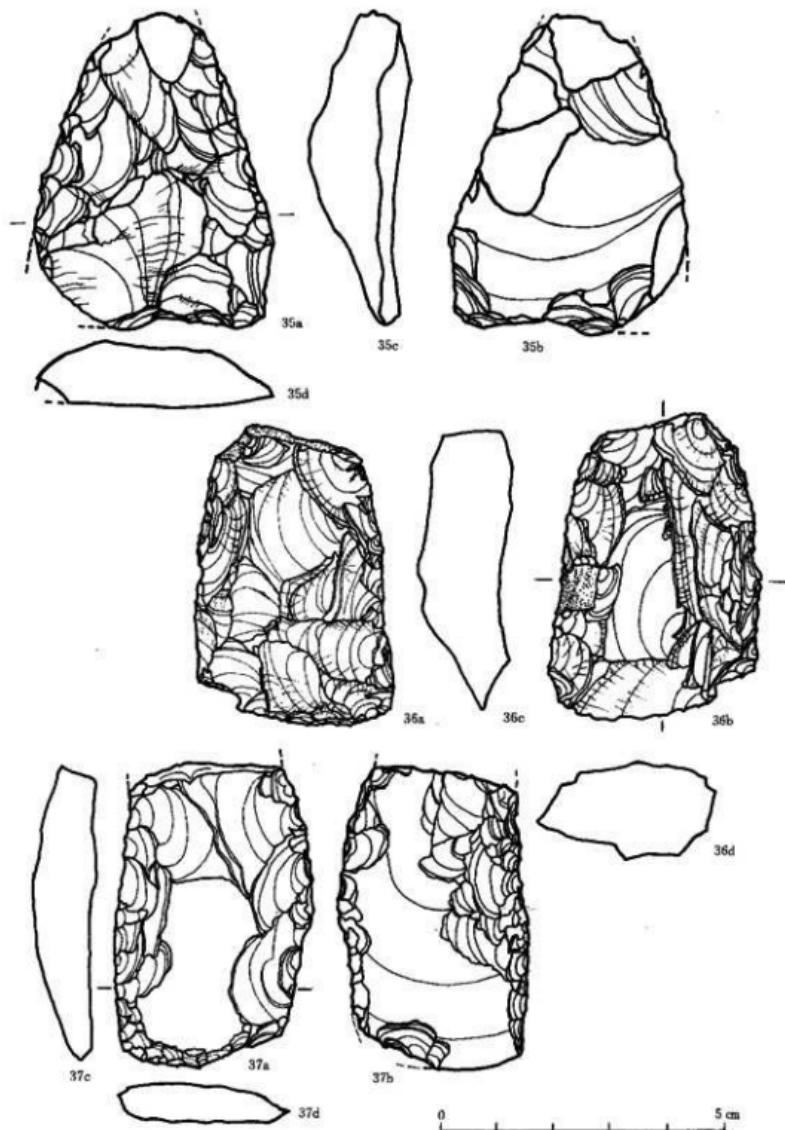
第12図 石器実測図



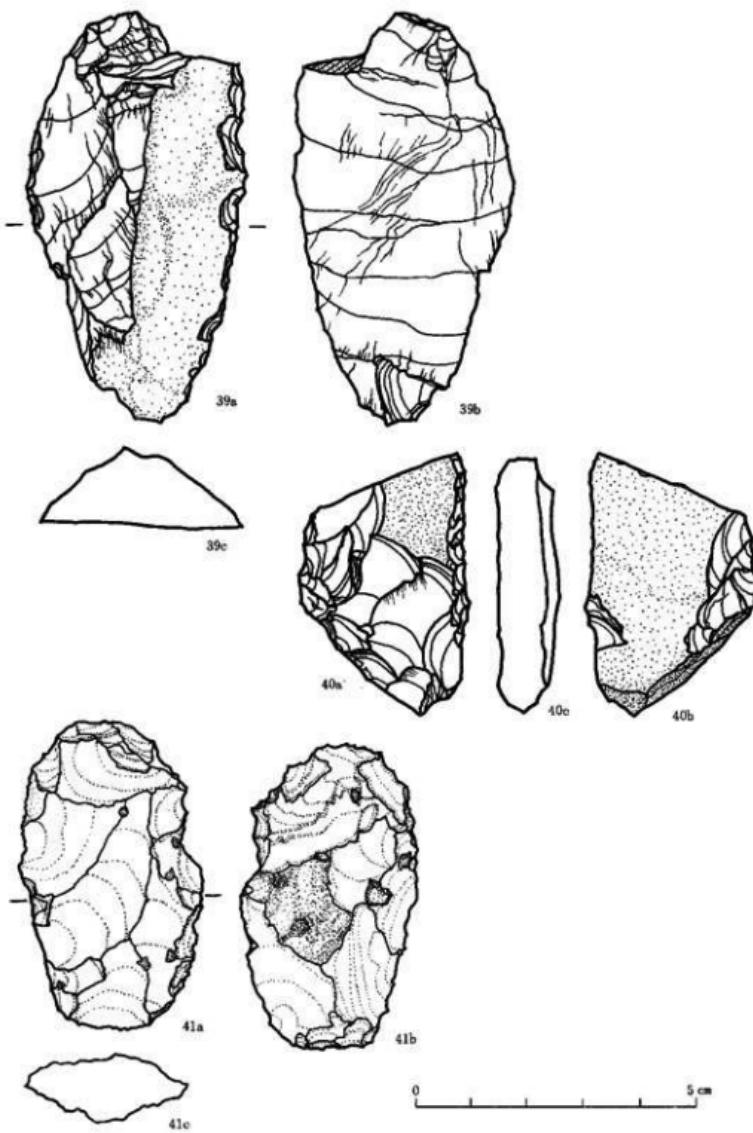
第13図 石器実測図



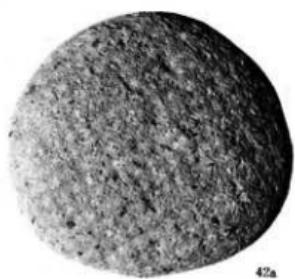
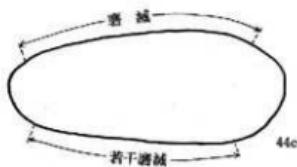
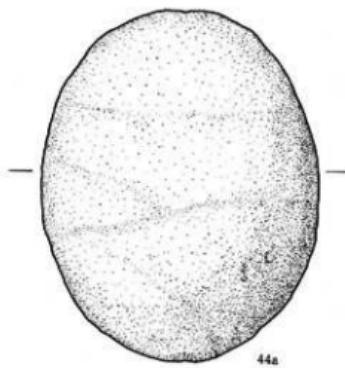
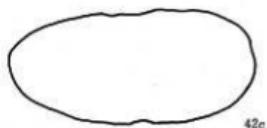
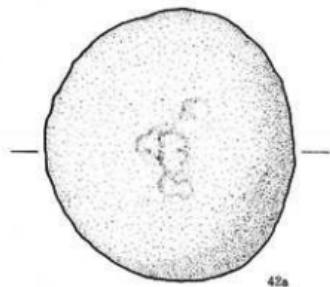
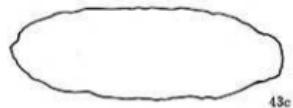
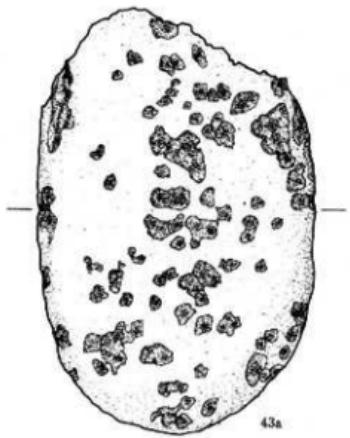
第14図 石器実測図



第15図 石器実測図



第16図 石器実測図



0 5 cm

第17圖 石器實測圖

## VII 考察とまとめ

### 1. 遺跡について

今回の調査対象区域は三部山遺跡全体からみれば、西端のやや傾斜する部分にあたり、調査の結果、A区B区とも基盤までの堆積は2層で、C区は1層の単純な層序であった。

遺物はC区からは全く出土せず、A・B区についても量的には非常に少なく、出土状態もまとまりをもたず、おむね第2層より出土しているが、明瞭な遺物包含層は確認できず、遺構や生活面を明らかにすることはできなかった。

調査前の表面観察にも感じたことだが、遺物の散布は調査対象区域の東側に多くみられた。調査でもB区よりもA区がチップを含む遺物の出土量が多く、このことは精査グリッドの結果からも確かめられた。三部山遺跡の主要部分は調査対象区域の東側、つまり残された区域にある可能性が強く、調査区域は遺跡の末端部分にあたるものであろう。

### 2 土器について

今回の調査によって出土した土器は、そのほとんどが胎土中に植物性繊維を含んだ繊維土器であったが、層位的には把握されなかった。すべてが体部破片で、非常に脆く、全体形を知るものは勿論、口縁部の形態を知るものさえなかった。

沈線文土器（1）は繊維を含まず、文様の短い斜めの沈線は、フ状につくものと考えられる。藏王町の明神裏遺跡に類似の土器がみられ、関東の田戸上層式に併行するものと思われる。

縄文条痕土器はたった1片の出土であり、型式は速断はできないが、表面に粗大な縄文が付されて、内面に条痕を持つものであるが、その施文は退化を示すものか、やや浅い条痕である。さらに、繊維の合入がやや多く、吸水性の強いものである。両面がひび割れて非常に脆い土器である。

繊維含入量、胎土、焼成、施文などからみて、素山Ⅱb式よりは、やや下るものではないかと考えられる。

羽状縄文土器は、東北南半では前期初頭の特徴的な文様であるが、本遺跡出土の土器も、繊維を含む結束のない羽状縄文で、大木1式に位置づけられるものであろう。

繊維を含まない単節の斜縄文土器（11）は、中期以降の一型式と考えられるが不明である。

薄手の無文土器は、繊維を含み裏面に調整擦痕をもつものであるが、上記のいずれの土器に伴うものか不明で、厚手の無文土器との関係も解明できなかった。しかし、いずれにしてもこの両者は、繊維を含み、調整擦痕を有する土器で、早期末から前期初頭に位置づけられる土器であろう。

### 3. 石器について

今回の調査による石器・フレイク・チップの出土総量は約700点をこす。このうち44点を行器として確認し、実測図を作製した。

このなかに2点の未製品（7、8）と思われる石器がある。調査中にも問題となった点に、出土するチップのなかに、非常に小さい径1cm以下の微細片の量が多いことと、未製品石器の山上である。つまり第1次的石器製作場から、未製品の石器を当調査区に持ち込み整形した、第2次的な加工の場があったのではないかということである。

しかし、この問題は発掘中には解明できなかった。今後、チップの整理が進み、石器との接合剖片などの発見があれば、第2次的な加工の場もあらためて考えられよう。

### 4まとめ

1. 本調査区からは、遺構、遺物包含層は発見されなかった。これは遺跡の主体部がもっと東にあり、当調査区は三部山遺跡の末端部にあたるためであろう。
1. 本調査区から、縄文時代早期末から前期初頭にかけての遺物と、縄文時代中期以降の一時期の遺物、石器類、さらに江戸時代末期の遺物が出土した。
1. 本遺跡は向山遺跡などとともに、土器の採集されない特異な遺跡として知られていたが、今回の調査によって、編年的位置づけがなされた。

### 参考文献

- 山内清男 昭4 関東北における繩文土器  
伊東信雄 昭15 宮城県遠田郡不動寺村素山貝塚調査報告  
伊東信雄 昭32 宮城県古代史・宮城県史1  
山内清男 昭33 縄文土器の技法  
菅野一郎編 昭37 日本の土壤型  
岸沢長介・林謙作 昭40 岩手県蛇王洞洞穴  
林 謙作 昭40 縄文文化の発展と地域性—東北  
飯沼寅治編 昭42 白石・蔵王・七ヶ宿社会郷土資料集  
興野義一 昭42 大木式土器理解のために(1)  
後藤勝彦 昭43 宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚  
白鳥良一 昭49 仙台市三神峰遺跡の調査  
宮城県高等学校理科研究会地学部会編 昭50 宮城県の地質案内  
宮城県文化財調査報告書第46集 宮城県遺跡地名表  
片倉信光・後藤勝彦・中嶋彰吾 昭51 白石市史・考古資料編

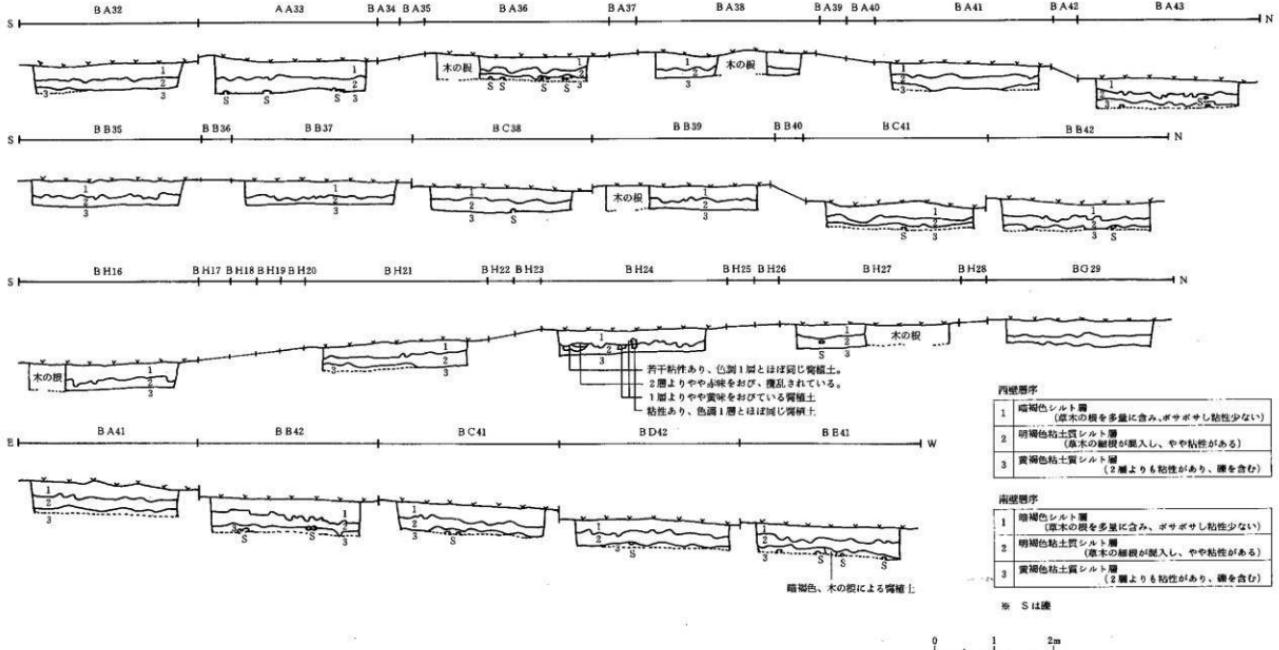
## VII あとがき

今回の調査は、事前調査や調査体制は必ずしも十分ではなかった。また解明できなかった問題もあったが、前述のような成果をおさめ得たことは、宮城県教育庁文化財保護課をはじめ、関係各機関や調査に参加した地元の協力者等、多くの方々の絶大な援助によるもので、厚く感謝の意を表するものである。

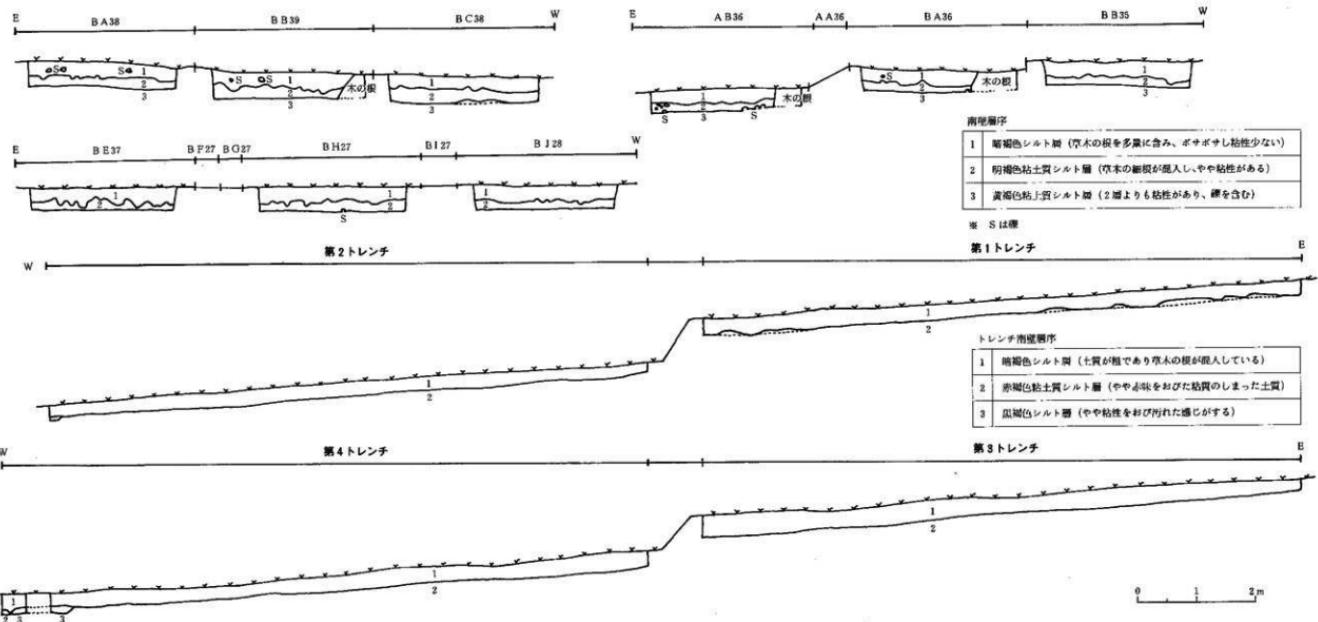
本稿を草するにあたり、東北大学考古学研究室の諸氏より数々の御指導、助言を得た。また、本道跡の植物の調査を心よく引受けさせていただいた上野雄規、佐々木敏雄の両氏、石質の同定をさせていただいた駒板典義氏に対して、執筆者一同記して感謝の意をささげるものである。

特に、白石市教育委員会社会教育課長、佐久間克、同課長補佐、太斎 亨の両氏、並びに小野寺産業（株）専務、佐久間勝市氏はじめ金井勝三氏ほか同社の多くの方々に対しても、重ねて感謝の意を表するものである。





第18図 グリッド縦断面図



第19回 グリッド、トレーニチ壁面図



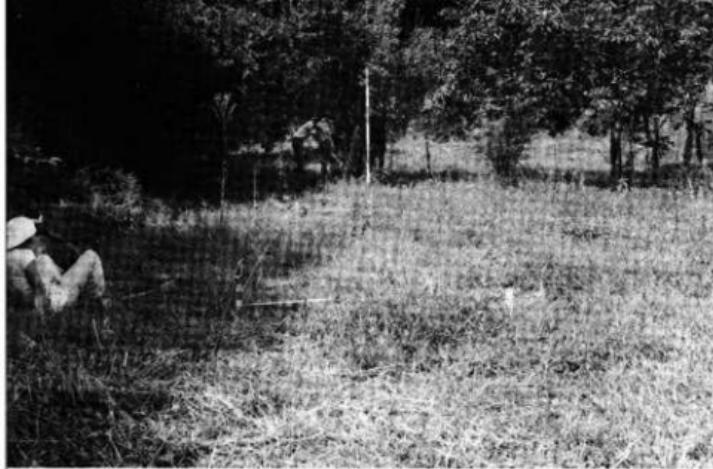
遺跡遠望



三部山遺跡  
(北から)



三部山遺跡A・B区



三部山遺跡C区

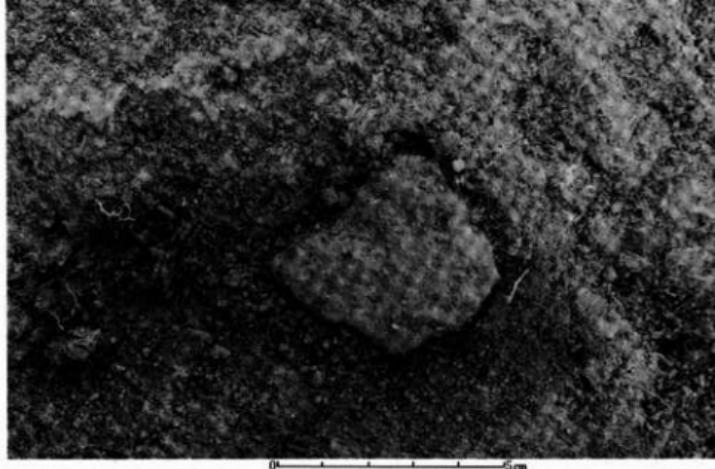


B A32グリッド土器  
出土状況 (遺物No10)

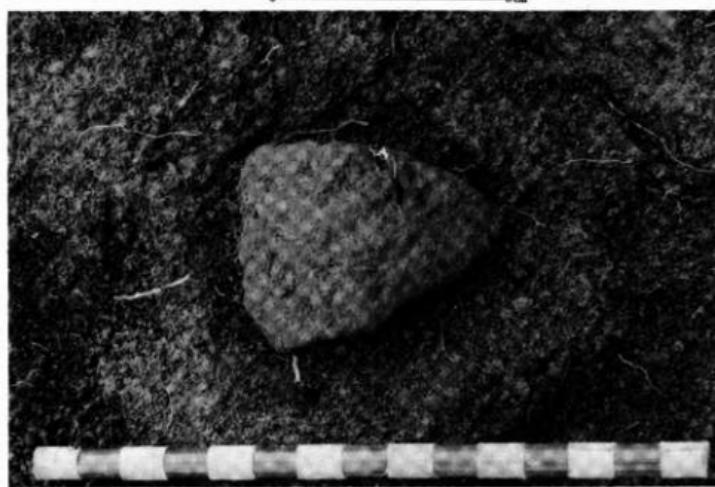


B A32グリッド土器  
出土状況 (遺物No11)

B B37グリッド土器  
出土状況（遺物No.6）



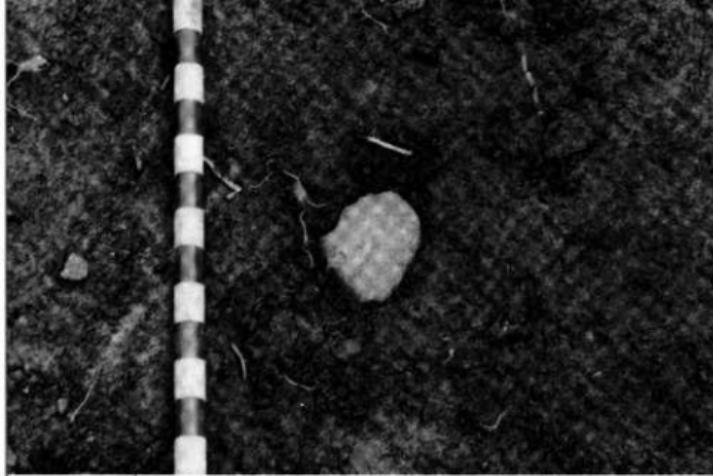
B B37グリッド土器  
出土状況（遺物No.5）



B H21グリッド石器  
出土状況（遺物No.1）



B A32グリッド石器  
出土状況（遺物No24）



B A36グリッド石器  
出土状況（遺物No21）



B B37グリッド石器  
出土状況（遺物No39）

B B39グリッド石器  
出土状況（遺物No12）



A A33グリッド石器  
出土状況（遺物No20）



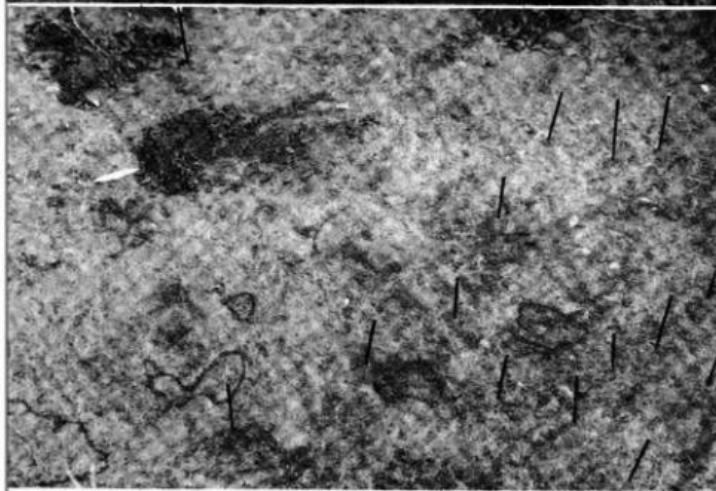
0 1 2 3 4 5cm

A A33グリッド石器  
出土状況（遺物No11）





A A33グリッド石器  
出土状況 (遺物No41)

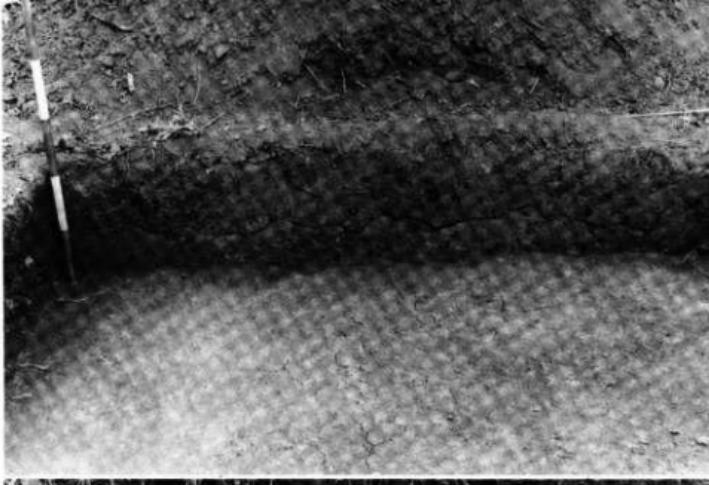


B B39グリッド木炭  
チップ出土状況



A A33グリッド西壁

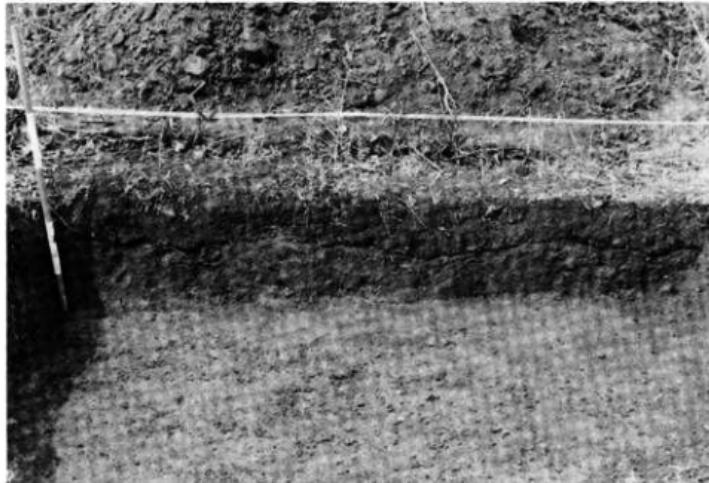
B B35グリッド西壁

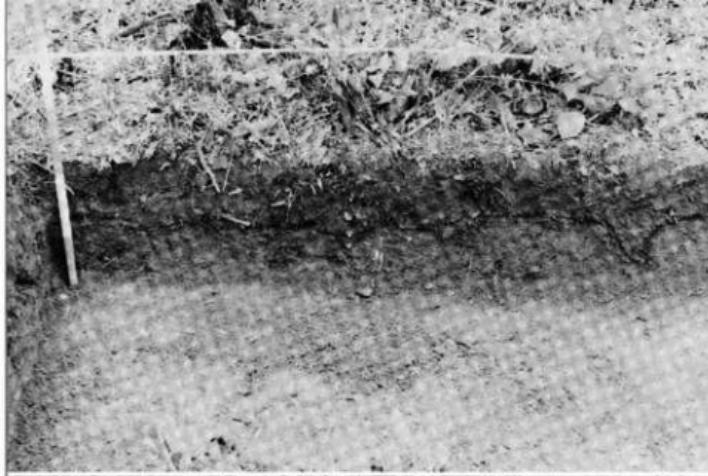


B E41グリッド西壁

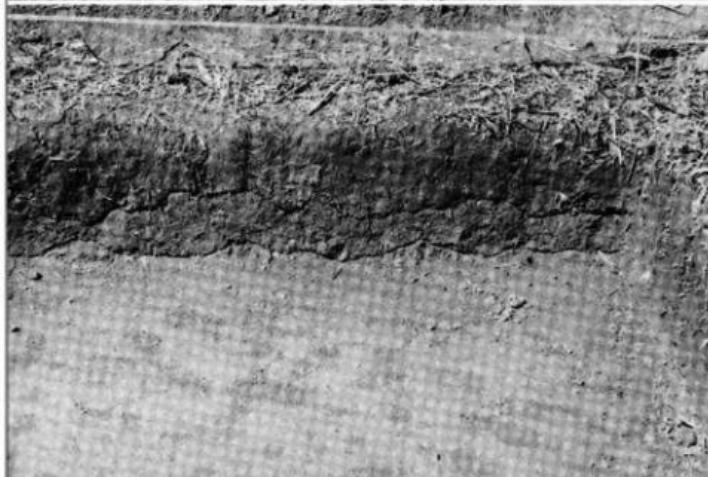


B A41グリッド西壁

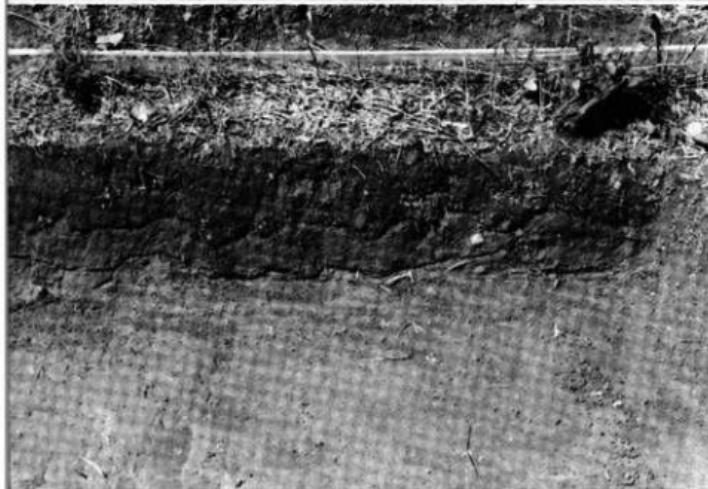




B D42グリッド西壁

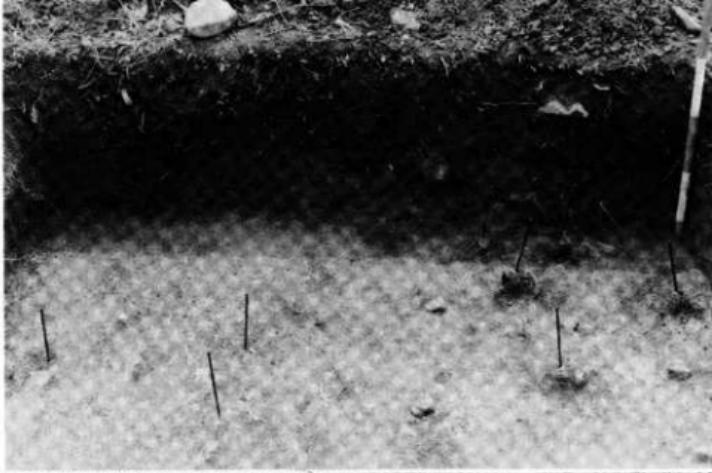


B B42グリッド西壁

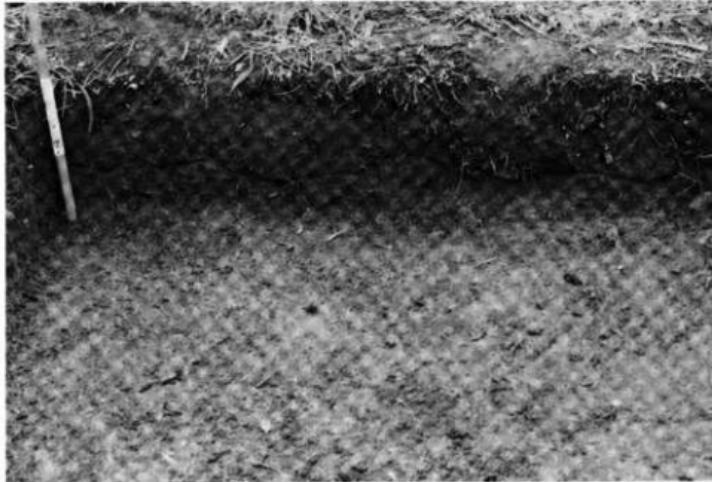


B A43グリッド西壁

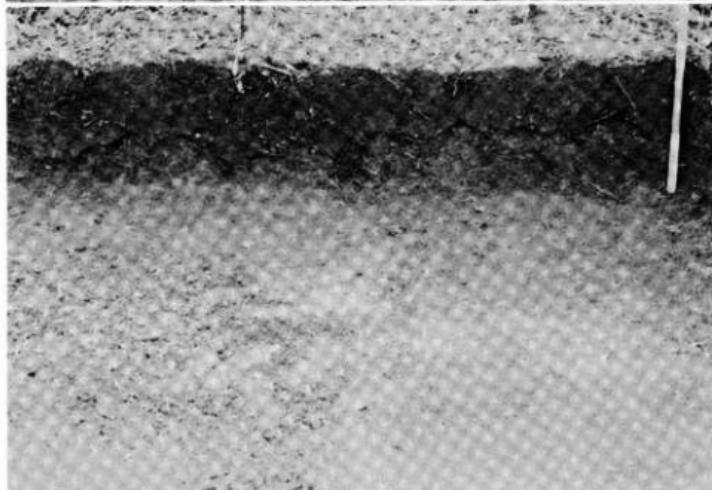
A A33グリッド南壁



B A36グリッド南壁

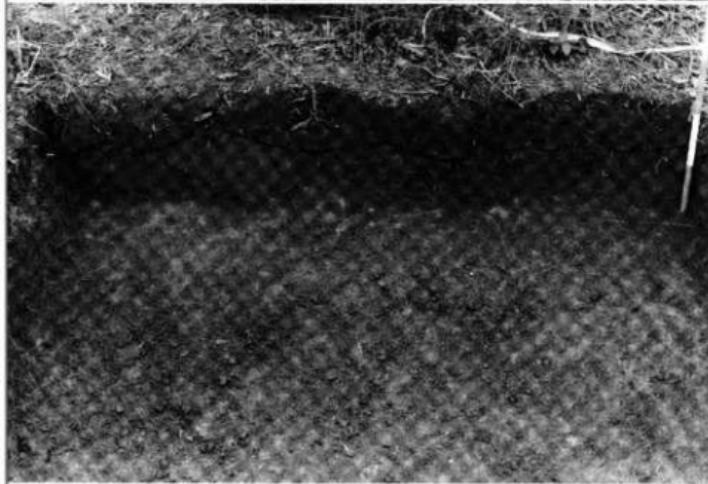


B B37グリッド南壁

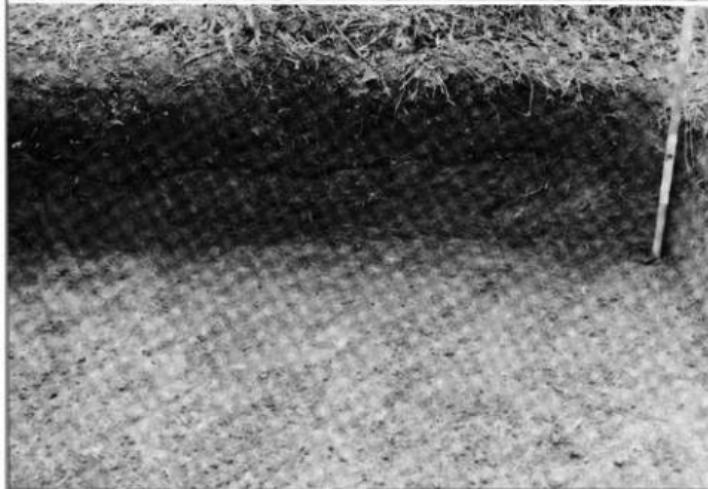




B A38グリッド南壁



B D40グリッド南壁

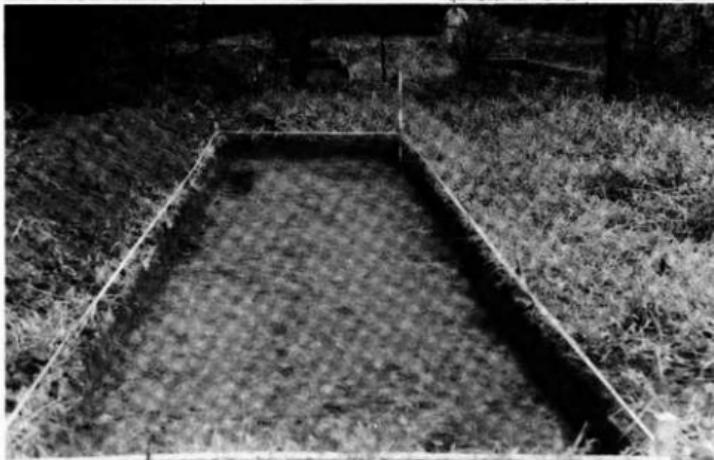


B A41グリッド南壁

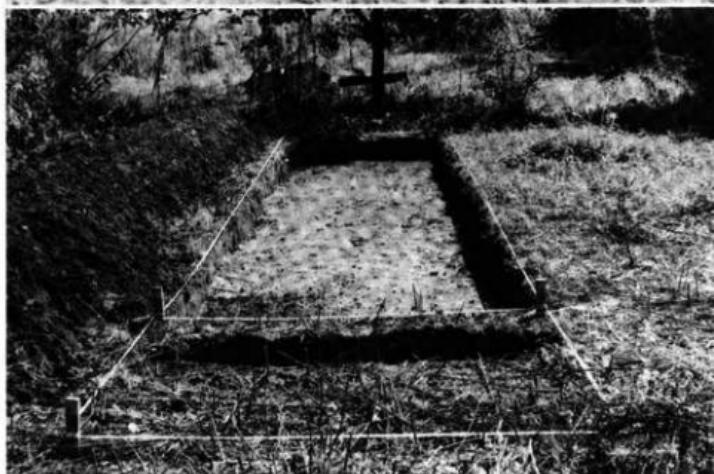
B D42グリッド南壁



C区第1 トレンチ

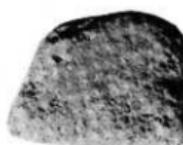


C区第4 トレンチ





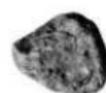
1 a



1 b



2 a



2 b



3 a



3 b



4 b



4 a



5 a



5 b

0 1 1 1 5 cm



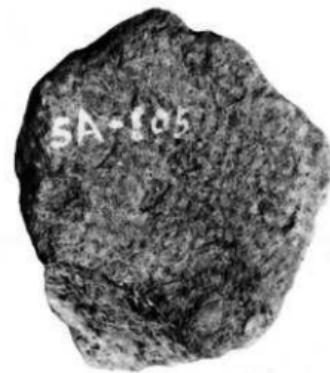
6 a



6 b



7 a



7 b



8 a



8 b





9a



9b



10a



11a



11b



12a



12b



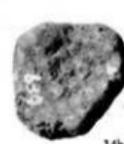
13a



13b



14a



14b



15a



15b



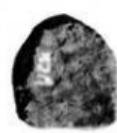
16a



16b



17a



17b



18a



18b

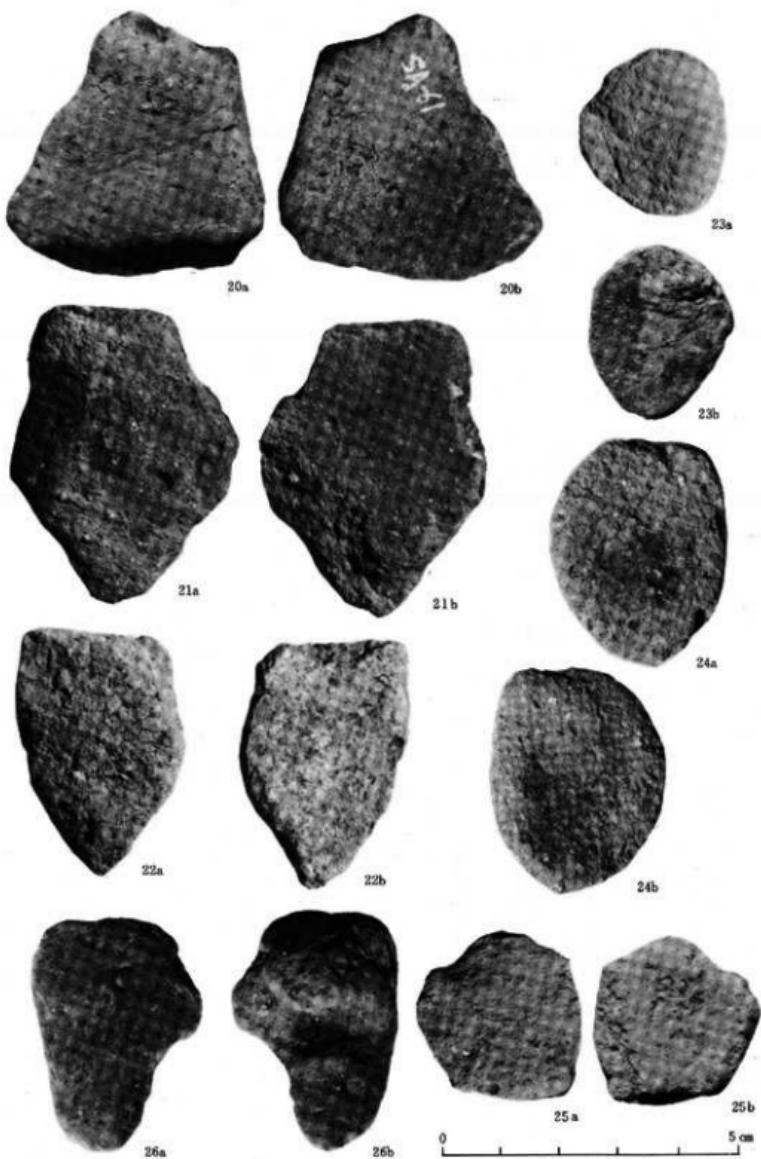


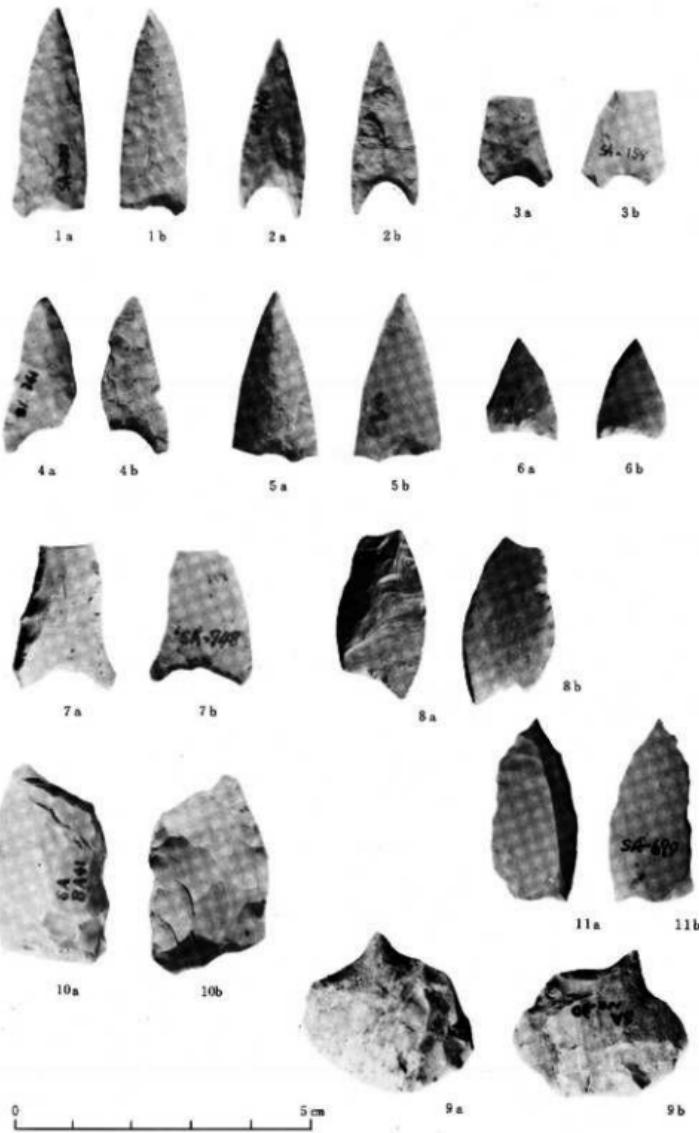
19a



19b

0 5 cm







12a



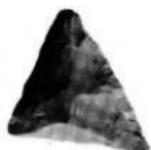
12b



13a



13b



14a



14b



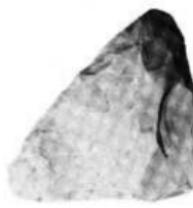
15a



15b



16a



16b



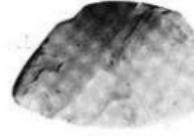
17a



17b



18a



18b



19a



19b

A scale bar marked with "0" at the left end and "5 cm" at the right end, indicating the size of the artifacts.



20a



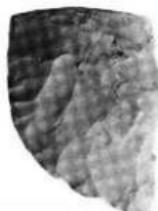
20b



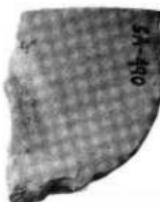
21a



21b



22a



22b



23a



23b



24a



24b



26a



26b



27a

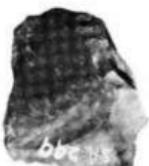


27b

0 1 1 1 1 5 cm



25a



25b



29a



29b



30a



30b



31a



31b



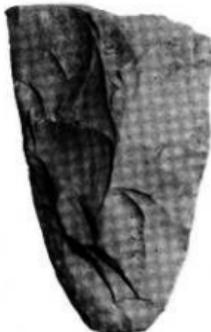
28a



28b



32a



32b

0 5 cm



33a



33b



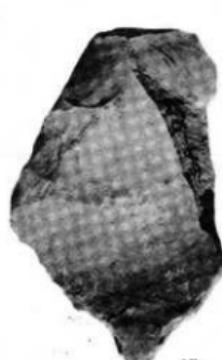
34a



34b



38a



38b

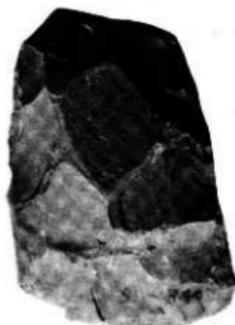




35a



35b



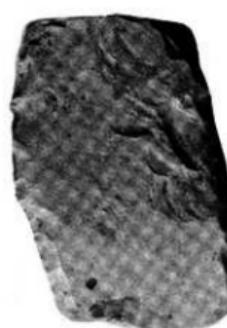
36a



36b



37a



37b

0 5 cm



39a



39b



40a



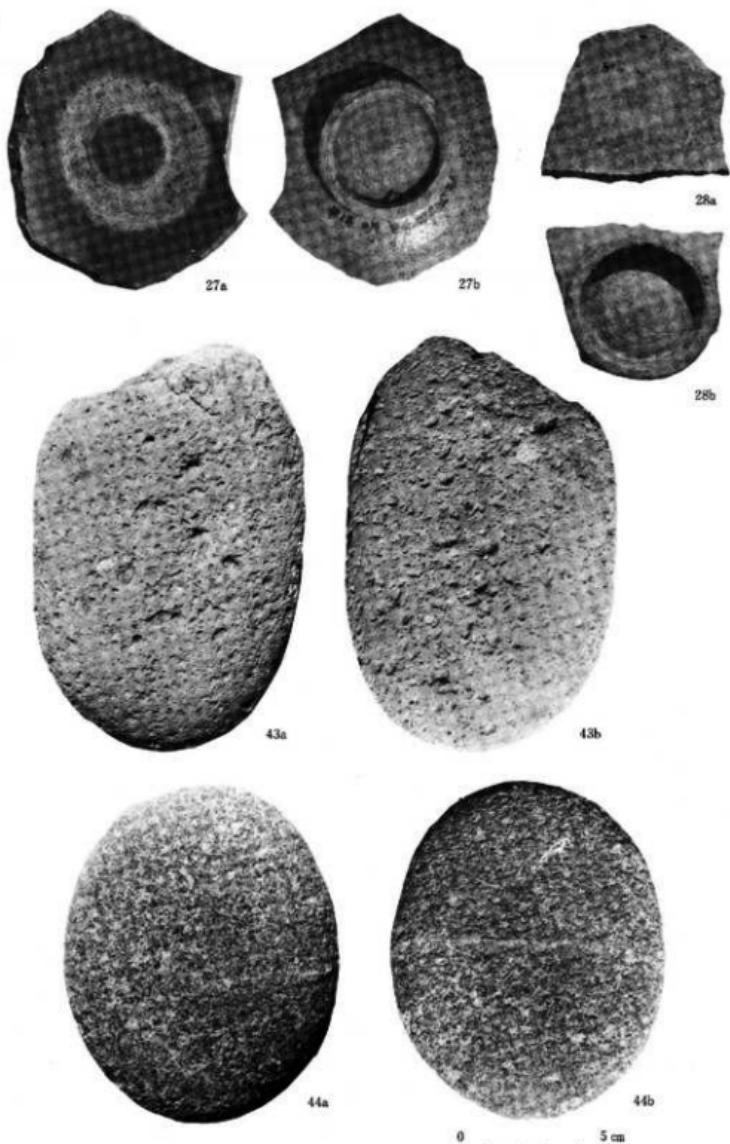
40b



41a



41b



### 三部山遺跡調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
まえがき	8	当事者側	当事者側
7	17	森樹	森樹
17	20	写真33	21日目に移す。
34	24	齊藤	齊藤
34	16	完掘りし	完削し
34	21	完掘り。	完削。
34	28	完掘りし	完掘し
35	4	完掘り。	完削。
35	4	完掘りし、	完削し、
35	15	完掘り。	完削。
35	22	完掘りし、	完削し、

白石市文化財調査報告書第17集

### 三部山遺跡調査報告書

昭和52年3月21日印刷

昭和52年3月31日発行

発行 白石市教育委員会  
宮城県白石市桜小路35 TEL5-2111

高野英雄  
白石市忍岡長安字下神明4

印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 電話256466

